五　日記

土佐日記……紀貫之
門出
忘れ貝
帰京

単元設定のねらい

王朝物語とともに、平安時代の散文学における主要な分野に、日記文学がある。『蜻蛉日記』『和泉式部日記』『紫式部日記』『更級日記』等、高校の教科書でも多くの日記文学が扱われている。それら日記文学の嚆矢が『土佐日記』である。

他の平安仮名日記は女性の手に成るものである。それに対して、記録を主たる目的として記されていた男性貴族の日記とは性質を全く異にし、日記文学というそれまでにはなかった新たな分野を切り拓くこととなった『土佐日記』は、男である紀貫之が女性に仮託して書いている。文学史上の重要事項として、紀貫之が『土佐日記』の作者であると同時に『古今和歌集』「仮名序」を著した人でもあることを考えあわせ、仮名という新しい表記の手段がこの時代の文学に与えた影響を考えさせたい。

ここでは、『土佐日記』の五十五日間の旅の日記から、「門出」「忘れ貝」「帰京」の三編を取りあげた。

「門出」には、作者が女性に仮託してこの作品を書いたことが示されていて、『土佐日記』の文学史的な意義を考える上で不可欠な章段である。「忘れ貝」は、『土佐日記』の内容の特徴に挙げられる亡児哀傷を考えるために、ぜひ読ませておきたい箇所である。「帰京」では、旅を終えて荒廃したわが家に戻った感慨が記され、また、亡児への思いが和歌にこめられている。このように、『土佐日記』がもつ主な要素に広く触れさせ、作品全体の様子を理解するための章段選択となっている。女性に仮託して日記を書くという独特のあり方がもつ文学史的な意義、言葉遊びを駆使した知的な表現、当時の制度や風習、旅の様子、そして幼くして他界したわが子への哀惜の情などに触れ、知識と情感を養わせたい。

単元の主な学習目標

・『土佐日記』の文学史的な意義を理解する。仮名日記が生まれた意義を考える。
・平安時代の地方官の制度や、船旅の危険や困難について理解する。
・『土佐日記』の諧謔的な側面を読み取る。
・個人的な感情がどのように表現されているか読み取る。
・紀貫之が文学史の上で果たした役割を確認する。

日記 土佐日記

◆紀貫之

教材のねらい

◉学習目標

・『土佐日記』の文学史的な意義を理解する。仮名日記が生まれた意義を考える。
・冒頭で、なぜ女性仮託がなされたのかを考える。
・平安時代の地方官の制度や、船旅の危険、困難について理解する。
・『土佐日記』の諧謔的な側面を読み取る。
・個人的な感情がどのように表現されているか読み取る。
・紀貫之が文学史の上で果たした役割を確認する。

◉学習指導のポイント

平安時代は多くの女性貴族たちが文学の担い手となった時代である。それは女性たちが仮名文字という新しい文字を得て積極的に使用したことと密接な関係にある。男性貴族が専ら漢字（仮名に対して真名という）を使っていたのに対して、仮名を使ったのは女性たちだった。仮名の使用は、繊細な感情と緻密な写実を表現することを可能とした。仮名は韻文の和歌のみならず散文の創作とも関わっている。最初は男性を作者としていた物語文学だが、やがて女性の手になる作品が生まれた。その最高峰が十一世紀初頭に書かれたとされる『源氏物語』である。一方で、平安時代には物語と並んで仮名日記の注目すべき作品が生まれた。これらの仮名日記は、貴族男性の手による漢文日記の伝統を基盤にしつつも、漢文日記では見られなかったこまやかな感情を表現し、新しい表現の世界を切り拓いたのである。そもそも漢文日記は官人としての男性貴族が子孫たちに儀式の次第や有職故実の知識を伝えるために書かれ、基本的には記録であった。それに対して、自己の感情を吐露し、文学としての性格を強くもった『土佐日記』は従来の漢文日記とはまったく異質の作品となった。『土佐日記』は日記文学というジャンルを切り拓いた、文学史的にも重要な作品なのである。この『土佐日記』を嚆矢（こうし）として、以後『蜻蛉日記』や『更級日記』のような女性の手による仮名日記が生まれることとなった。その『土佐日記』は、女性に自らを仮託するという手法でもって、仮名を導入し、文学性の高い日記文学を創造した。そこから事実の記録ではない、自らの体験を回想し、虚構や脚色を交えて表現する仮名日記が書き継がれていくこととなる。

『土佐日記』は、日々の記録の体裁をとりつつ、国司となった作者の赴任先である土佐から都までの五十五日間の旅を描いている。しかし、単純な紀行文とはいえず、歌人である紀貫之の歌論、人の心の変わりやすさに対する批判、幼くして亡くなった子に対する思いなど、さまざまな要素が盛り込まれている。

今回採録した箇所は、「門出」「忘れ貝」「帰京」の三か所である。「門出」と「帰京」は、『土佐日記』の執筆意図を考える際に外せない箇所であり、「忘れ貝」は、『土佐日記』の表現の特徴である亡児哀傷を考えるために重要な意味をもつ箇所である。

まず冒頭部にあたる「門出」には、作者が女性に偽装して「男もす

なる日記といふものを、女もしてみむとて」仮名日記を書くと宣言した有名な一節があり、『土佐日記』の文学史的な意義を考えたい。この序文に続く記述には言葉遊び的な部分も散見され、『土佐日記』のもつ多様な性格を考える手がかりとなる。また、「忘れ貝」は、亡くなった娘に対する哀傷の思いが表出された箇所である。さらにこの場面からも、当時の船旅の状況を垣間見ることができる。「帰京」もまたよく知られた場面であり、荒廃したわが家に戻っての感慨が記され、亡くなった子を哀惜する思いが和歌で述べられている。序文と関連させて読むことによって、『土佐日記』という作品がより立体的に見えてくるはずである。

本教材を通して、以後さまざまな表現を可能にした平安時代の仮名散文について理解を深め、のちの学習に役立つようにしたい。また、以後『蜻蛉日記』『和泉式部日記』『紫式部日記』『更級日記』『讃岐典侍日記』と書き継がれていく、平安時代に隆盛を迎える仮名日記というジャンルについて理解させることも大切だろう。

学習指導の展開と評価

◉学習指導案例（配当時間三時間の場合）

第１時限

時間	目標	学習活動と指導内容	指導上の留意点
導入	❶『土佐日記』が、男性による漢文日記から、女性による仮名散文日記への流れを切り拓いたことを理解する。 ❷「門出」を読み、男性作者が女性仮託という手法を用いた意味について考える。	1　歴史的仮名遣いや語句に注意しながら音読する。	1　男性による漢文日記は、本質的に記録であったこと。一方、女性は仮名を用いて（和歌や物語など）柔軟な心情を表現することができたという文学史的背景を理解させる。
展開		1　「なり」の意味の違いを理解する。	

	第１時限	第２時限
	❸作者について、教科書の記述を中心に把握する。 ❹ユーモアのある表現や風刺を含む叙述を指摘し、その意味を考える。	❶「忘れ貝」を読み、当時の船旅の習俗や危険性について理解する。 ❷亡児哀傷記事が書かれた意義を考える。 ❸和歌に含まれる比喩表現（忘れ貝、白玉など）を理解する。 ❹記述の構成を考える。
導入	1　平安時代の仮名日記や紀貫之について便覧や年表を使って調べる。 1　女性仮託の意味を考える。	1　歴史的仮名遣いや語句に注意しながら音読する。
展開		1　当時の船旅がいかに困難であったかを理解する（調べてもよい）。 1　亡児哀傷の記述を整理し、その意義を考える。 1　和歌にある比喩的な表現を抜き出し、表現効果を理解する。
まとめ	2　ユーモアのある表現や風刺を含む表現をまとめる。	
	1　男性が漢字を使い、女性が仮名を使っていたこと。仮名による「日記」は、新たな文学ジャンルの開拓であったことに注意させる。 1　紀貫之は専門歌人であり、『古今和歌集』「仮名序」の作者でもある。官位は高くないが、当時の文学者として指導的立場にあったことを確認させる。 2　「馬のはなむけ」「あざれあへり」「足は十文字」などユーモラスな表現を通して、言葉の機知や諧謔の効果を考えさせる。	1　楫取りの会話や楫取りに向けた作者の批判の言葉に注目させ、船旅で楫取りが果たしていた役割を考えさせる。 1　亡児哀傷記事が記された意味を考えることをとおして、この作品の文学性と内面性に注目させる。 1　亡き子を偲ぶ表現を抜き出し、そこにちりばめられた比喩の表現効果を考えさせる。

	第３時限
	❶「帰京」を読み、土佐赴任期間に生じた京の家の変化を作者がどのように記しているかを把握する。 ❷最後の和歌二首にこめられた作者の心情について理解する。 ❸跋文の「とまれかうまれ、疾く破りてむ。」について、冒頭文との関わりを中心に考える。 ❹『土佐日記』とはどのような作品かを整理する。
まとめ	導入 2　全体の構成を俯瞰し、まとめる。
2　船頭への批判→忘れ貝の和歌→女の歌、という構成を理解させる。	展開 1　歴史的仮名遣いや語句に注意しながら音読する。 1　京の家の変化をまとめる。 1　「小松」「松」にたとえられたものは何かを考える。 1　跋文の表現の虚構性について考える。 まとめ 2　『土佐日記』全体について振り返りまとめる。
1　京の家の荒廃がどのように記されているか、さらにその背後にどのような人の心が描かれているかを考えさせる。 1　「小松」「松」という比喩表現を用いることで、作者がいかに哀切な思いを表現しているかを理解させる。 1　末尾の表現が『土佐日記』冒頭の表現と対応していることに注意させる。記録としての日記ではなく、あくまでも文学的な遊びの作品であること、その背後に謙遜とともに自信がこめられていることを考えさせる。 2　便覧や教科書の年表を使って平安時代の日記文学の展開を確かめてもよい。	

◉アクティブ・ラーニングのために

《ねらい》

・二首の和歌を比較することで、対比的に理解することの有効性を学ぶ。
・ディベート的に長所と短所を明らかにし、もののとらえ方を広げる。

《学習課題と実践方法》

◆課題

「寄する波……」と「忘れ貝……」の二首のどちらがよいか、よい点とよくない点を挙げて話し合ってみよう。（「忘れ貝」の「学習の手引き」三の発展的授業）

◆学習活動と指導上の留意点

1　グループごとに割り振られた歌を支持する立場で、よい点とよくない点を話し合う	①ワークシートに意見を書きあげていく。 **（指導上の留意点）**それぞれの和歌については、語句の説明、口語訳をしておく。内容面だけでなく、表現面についても考えさせたい。
2　それぞれの歌のよいと思う点、よいと思えない点を発表する	①「寄する波……」を支持する班は、「寄する波……」のよい点と「忘れ貝……」のよくない点を発表する。 ②「忘れ貝……」を支持する班は、「忘れ貝……」のよい点と「寄する波……」のよくない点を発表する。 **（指導上の留意点）**それぞれの発表を板書にまとめていく。
3　出された意見に対して反駁する立場で意見を出し合う	①それぞれの立場から挙手で意見を述べる。 **（指導上の留意点）**それぞれの意見を板書に書き加えていく。
4　振り返り	①授業をふまえて、自分の考えをワークシートにまとめる。 **（指導上の留意点）**当初の立場を離れ、個人として支持する歌を選び、よい点とよくない点を書き上げさせる。

◆ワークシート『土佐日記』補

年　組　番　氏名

①「忘れ貝」の本文中にある二首のうち、どちらかを支持する立場から、それぞれの歌のよい点とよくない点についてまとめてみよう。また、それぞれの主張を発表してみよう。

＊支持する歌　　寄する波……　・　忘れ貝……

	よい点	よくない点
寄する波……		
忘れ貝……		

②反対の立場の意見もふまえ、自分自身はどちらの歌がよいと思ったか選び、その理由についてまとめてみよう。

＊よいと思う歌　　寄する波……　・　忘れ貝……

（理由）

◉評価規準例

評価の観点	単元の目標	具体的な評価規準	評価方法
関心・意欲・態度	表現や当時の風習などをふまえつつ、作者の心情を理解しようとする。	表現や当時の風習などをふまえつつ、作者の心情を理解しようとしている。	行動の観察
読む能力	表現や当時の風習などをふまえつつ、作者の心情を理解する。	表現や当時の風習などをふまえつつ、作者の心情を理解している。	行動の分析 記述の確認
知識・理解	作品の文学的意義を理解する。	作品の文学的意義を理解している。	記述の点検

教材の研究

◉作品

土佐日記（とさにっき）

①書名

『恵慶法師集』「つらゆきがとさの日記を、ゑにかけるを」（一九二番歌）とあるのが書名の初出（恵慶は、天徳から寛和ごろ［九五七年〜九八七年］の歌人）である。作者紀貫之没後まもなく、すでに「とさの日記」との書名があったことが知られる。また、藤原定家が一二三五（文暦二）年に書写した貫之自筆本の外題には「土左日記」とあったという。現存写本の書名も全て「土左日記」とし、原典尊重の立場からこの書名を採るべきとする考えもあるが、地名「土佐」との表記の整合性によって「土佐日記」と表記するのが一般的となっている。なお「土佐日記」という書名の由来については、①土佐守が書いたためとする説と②土佐から京への旅路を描いたためとする説の二説がある。

②成立

成立年次は未詳。九三五（承平五）年二月十六日に帰京して以後、あまり遅くない時期に成立したのだろう。九三五（承平五）年後半頃の成立と想定する説が多い。日付が全て記されているが、今日の日記や当時の漢文日記のような毎日つけられた日記というわけではなく、メモなどをもとに回想して記されたと考えられている。紀貫之は六十代後半のすでに老境というべき年齢であった。この作品の成立の背後に、土佐での日々の間に、彼の文学上の庇護者であった醍醐天皇（延長八年）、宇多天皇（承平元年）、藤原定方（承平二年）、藤原兼輔（承平三年）といった人々が次々と亡くなったことによる喪失感を想定する説もある。

③内容

九三四（承平四）年十二月二十一日に土佐の国府を出て、翌年二月十六日に京の家に帰り着くまで、五十五日間に及ぶ上京の旅を記した日記。全体を三部に分けて考えると理解しやすい。第一部（出発から元旦まで）は、望郷の念や亡児を思う親の情などをモチーフに、人々との交流を中心に描く。第二部（二月五日までの三十五日間）は、風波の荒い外海の悪天候に、停滞を余儀なくされる一行の焦燥を、船頭への不満を織り交ぜながら描く。難所室戸岬を越えてやっと一行は落ち着く。第三部（帰京まで）は、淀川の川上りを背景に、周辺の人々や帰京した家の隣人との関わりを描く。最後は、なおもやまぬ亡き子への哀傷を歌って幕を閉じる。

全体に、旅程の正確な実録を目的としたものではなく、亡児哀惜や無常観、望郷といった人事に関わるもの、歌論展開や言語遊戯といった文学表現に関わるものなど多様な内容をもつ。虚構や脚色が認められる点でも、創作性、文学性が高い。

④表現上の特色

作者は、自身を同行の女性に仮託し、女性の手になる仮名日記を装っている。それまでの日記は男性によって漢文で書かれるのが常であったので、仮名文の日記は極めて革新的であった。随所に配された和歌とあいまって、仮名文の繊細さを生かした情感豊かな紀行文だが、対句や漢文訓読語など男性用語も多く用いられ、諧謔表現やシニカルな批評眼に老境の紀貫之の素顔ものぞく。全体に構成意識が強いことも特質としてあげられる。

⑤文学史的位置

『土佐日記』の文学史的価値は何といっても文学的な仮名日記の嚆矢

となった作品であったということである。それまで記録として日々付けられていた男性による漢文日記に対して、仮名を使って京への旅路を自己の思いとともに回想して記した『土佐日記』は新しい日記文学というジャンルを切り拓いた。すでに『古今和歌集』を編纂し、さらにその勅撰集の序を仮名で書いた貫之にとって、仮名で日記を記す意義は彼の内面にとどまらず同時代の読者にとってもまことに重いものがあったと思われる。なお後述するように、この時代にはすでに『太后御記』という仮名日記が女性によって書かれていたようだが、これは記録的性格が強く、『土佐日記』以下の文学性の高い仮名日記（日記文学）とは性格を異にする。

⑥周辺作品との関連

同時代の仮名日記として、醍醐天皇の后穏子に仕えた女房が主人の動静を記した『太后御記』という作品があったと伝えられている（散逸し現在そのほんの一部しか伝わらない。現在伝わるのは九〇七（延喜七）年から九三四（承平四）年までの六か所）。この作品は記録としての性格が強いものと考えられるが、このような仮名使用の高まりの機運が貫之の『土佐日記』執筆につながっていたと考えることもできる。また、紀行文ということでは、やや前代の漢文日記であるが、唐の五台山に渡った円仁の『入唐求法巡礼行記』があったことも見逃せない。これは八三八（承和五）年から九年を超える漢文日記であるが、渡唐の貴重な記録であり、航海の厳しさも生々しく記されている。ただ『土佐日記』の独創性は際立っており、周辺作品の中で特出した存在であることも確かである。

⑦後世への影響

仮名で書かれた文学性の高い日記として、続く『蜻蛉日記』『和泉式部日記』『紫式部日記』『更級日記』『讃岐典侍日記』などの女性の手になる仮名日記の先蹤となった。『土佐日記』に内在する虚構性、創作性も、後続の仮名日記に継承されてゆくこととなる。『土佐日記』の紀行文学的性格も『更級日記』の上洛の記や鎌倉時代の『十六夜日記』などに受け継がれる。『更級日記』の上洛の記述には言葉遊び的な記述が認められ、『土佐日記』との関係を考える上でまことに興味深い。

◉作者

紀貫之（きのつらゆき）

八七二（貞観一四）年?～九四五（天慶八）年?。『土佐日記』の作者であり、『古今和歌集』の撰者として有名。他に、『新撰和歌集』を撰し、家集『貫之集』がある。『古今和歌集』に最も多くの歌が採られたように、当時を代表する歌人であった。『古今和歌集』の「仮名序」の執筆も文学史的に大きな意義が認められる。そこでは和歌の効用が説かれ、和歌史がまとめられ、六歌仙評などの歌論が展開していた。詠んだ和歌は行幸従駕や屏風歌の作成が多く、専門歌人としての活躍が目立つ。宇多天皇や醍醐天皇などの庇護のもとで歌才を発揮した。映像的な思考による和歌や理知的な比喩表現を得意とし、後世に多くの影響を与えた。漢文隆盛な時代に、仮名文字の文芸的な価値を押し進めるのに重要な役割を果たしたことは特筆すべき業績である。

紀氏は、古い武人の家系として名門であったが、平安時代には藤原氏に圧倒され、過去の栄光を残すのみとなっていた。貫之は、木工権頭を極官（官位は従五位上）とし中流貴族で終わった。『土佐日記』は六十代の頃の、貫之老境の著作である。

◉出典

本文は『土佐日記　蜻蛉日記　紫式部日記　更級日記』（新日本古典文学大系）長谷川政春・今西祐一郎・伊藤博・吉岡曠（一九八九年・岩波書店）によった（『土佐日記』の校注は長谷川政春）。同書の底本

は東海大学付属図書館蔵（桃園文庫旧蔵）青谿書屋本である。この青谿書屋本は紀貫之自筆本を書写した為家本（現在学校法人大阪青山学園所蔵）を忠実に書写したもので、現在伝わらない紀貫之自筆本を垣間見る貴重な写本の一つである。教科書への採録にあたって、原則この本を底本とする新日本古典文学大系の表記に従った。

▼小中学校教科書での扱い▲

小・中学校の教科書では「土佐日記」から次の箇所が教材として取りあげられている。（原則として、本教材及びそれに準ずるもののみをあげる。）

〈中学校〉平成24年度版（27年度まで使用）
門出　教育出版3年（部分）・東京書籍1年（部分）・光村図書3年（部分）

〈中学校〉平成28年度版
門出　東京書籍1年（部分）

門出

◉大意

男も書くという日記というものを、女の私も書いてみよう。ある年の十二月二十一日に帰京の旅に出立した、その旨を少し書きつけてみる。任期を終え、引き継ぎを済ませた国司は、官舎から出て船に乗る場所へと移る。親しい人々が別れを惜しんでしきりにやってきては大騒ぎをするうちに、その日は夜が更けた。翌二十二日は、和泉の国までの平穏無事を神仏に祈る。藤原のときざねは、「船路」なのに「馬のはなむけ（送別の宴）」をしてくれた。皆すっかり酔って、おかしなことに、（腐らないはずの）潮海であざれ（腐れ）合っている。次の二十三日は、八木のやすのりという、そんなに近く仕えていた者ではない人が、盛大で立派な送別の宴を催してくれる。こうして心ある人がたくさん見送りに来るのは、やはり国司の人柄によるのだろうか。二十四日には、国分寺の僧官が訪れ、その場の者は皆、酔い痴れて、「一」文字さえ知らぬ者が、なんと足では「十」文字を踏んで楽しんでいる。

◉全体の構成

段落	ページ・行	大意
第一段	初め～274・3「書きつく。」	**日記の書き初め** 男も書くという日記というものを、女の私も書いてみようと思う。ある年の十二月二十一日に出発した旅の日記を少しばかり書きつけておく。
第二段	274・4「ある人、」～274・7「夜更けぬ。」	**旅立ち** ある人が、四、五年の任期を終え、国司交替の引き継ぎも済ませ、官舎を出て帰京の船に乗る所へ移る。大勢の見送りの人々でごった返しているうちに、夜も更けてしまった。
第三段	274・8「二十二日に、」～275・3「あざれあへり。」	**神仏への祈り** 二十二日に、和泉の国までの船旅の安全を神仏に祈る。藤原のときざねが送別の宴を開く。皆ひどく酔って、海のほとりでふざけ合っている。

第四段	275・4「二十三日。」〜275・11「褒むるにしもあらず。」
	別れの宴 二十三日は、八木のやすのりという、国府で近く仕えていたわけではない者が、りっぱな送別の宴を催した。これも国司の人柄であろうか、たいていは国司離任の時など、その国の人々は、さほど見送りに来ないものだが、真心ある者は人目を気にせずにやって来た。これは、贈り物をもらったから褒めるのではない。
第五段	275・12「二十四日。」〜終わり
	千鳥足 二十四日、国分寺の僧官が送別のご挨拶に来られた。その場にいた人々は、身分の上下を問わず、子どもまでもが、皆すっかり酔っぱらって、一という字さえ知らぬ者が、足では十文字を踏んで興じていた。

◉品詞分解

❶男（をとこ）　も　す　なる　日記（にき）　と　いふ　もの　を、　女（をむな）　も　し
係助（強意）　動（サ変・終止）　助動（伝聞・連体）　格助（引用）　動（ハ四・連体）　格助（対象）　係助（並列）　動（サ変・連用）

て　み　む　と　て、　する　なり。
接助（単接）　動（マ上一・未然）　助動（意志・終止）　格助（引用）　接助（単接）　動（サ変・連体）　助動（断定・終止）

❷それ　の　年（とし）　の　十二月（しはす）　の　二十日（はつか）あまり一日（ひとひ）　の　日（ひ）　の　戌（いぬ）　の　刻（とき）
代名　格助（体修）　格助（体修）　格助（体修）　格助（体修）　格助（体修）　格助（体修）

に、　門出（かどで）　す。　❸そ　の　由（よし）、　いささかに　もの　に　書（か）きつく。
格助（時間）　動（サ変・終止）　代名　格助（体修）　形動（ナリ・連用）　格助（対象）　動（カ下二・終止）

❹ある　人、県（あがた）　の　四年（よとせ）五年（いつとせ）　果（は）て　て、　例（れい）　の　ことども　みな　し
連体　格助（体修）　動（タ下二・連用）　接助（単接）　格助（体修）　副　動（サ変・連用）

終（を）へ　て、　解由（げゆ）　など　取（と）り　て、　住（す）む　館（たち）　より　出（い）で　て、
動（ハ下二・連用）　接助（単接）　副助（例示）　動（ラ四・連用）　接助（単接）　動（マ四・連体）　格助（起点）　動（ダ下二・連用）　接助（単接）

船（ふね）　に　乗（の）る　べき　所（ところ）　へ　渡（わた）る。　❺かれ　これ、　知（し）る　知（し）ら
格助（対象）　動（ラ四・終止）　助動（当然・連体）　格助（方向）　動（ラ四・終止）　代名　代名　動（ラ四・連体）　動（ラ四・未然）

ぬ、　送（おく）り　す。　❻年（とし）ごろ　よく　比（くら）べ　つる　人々（ひとびと）　なむ、　別（わか）れがたく
助動（打消・連体）　動（サ変・終止）　形（ク・連用）　動（バ下二・連用）　助動（完了・連体）　係助（強意・係・結流）　形（ク・連用）

思（おも）ひ　て、　日（ひ）しきりに、　とかく　し　つつ、　ののしる　うち　に、　夜（よ）　更（ふ）け
動（ハ四・連用）　接助（単接）　副　動（サ変・連用）　接助（並列）　動（ラ四・連体）　格助（時間）　動（カ下二・連用）

ぬ。
助動（完了・終止）

❼二十二日（はつかあまりふつか）　に、　和泉の国（いづみのくに）　まで　と、　平らかに（たひら）　願（ぐわん）　立つ（たつ）。　❽藤原（ふぢはら）のときざね、　船路（ふなぢ）
格助（時間）　副助（範囲）　格助（引用）　形動（ナリ・連用）　動（タ下二・終止）

なれ　ど、　馬（むま）のはなむけ　す。　❾上中下（かみなかしも）、　酔ひ飽き（あき）　て、　いと　あやしく、　潮海（しほうみ）
助動（断定・已然）　接助（逆接・確定）　動（サ変・終止）　動（カ四・連用）　接助（単接）　副　形（シク・連用）

の　ほとり　にて、　あざれあへ　り。
格助（体修）　格助（場所）　動（ハ四・已然）　助動（存続・終止）

◎口語訳

❶男も書くと聞いている日記というものを、女の私も書いてみようと思って、書くのである。
❷ある年の十二月の二十一日の午後八時頃に、（館から）出発する。❸その旅の様子を、少しばかりものに書きつける。
❹ある人が、国司としての四、五年の任期を終えて、国司の交替時の事務の引き継ぎを全て済ませて、（引き継ぎ任務完了を証明する）解由状などを受け取って、今まで住んでいた国司の官舎から出て、船に乗るはずの場所へと移動する。❺あの人もこの人も、知っている者も知らない者も、見送りをする。❻この数年来親しく交際していた人たちは、別れがたく思って、一日中あれやこれやと、用事を済ませながら、大騒ぎしているうちに、夜が更けてしまった。
❼二十二日に、（さしあたって）和泉の国まで、無事であるようにと神仏に祈願する。❽藤原のときざねが、船旅なのに、馬のはなむけ（＝送別の宴）をしてくれる。❾上、中、下あらゆる身分の者が、すっかり酒に酔って、たいそうおかしなことに、（腐る〔あざる〕はずのない〔塩分のきいた〕）潮海の近くで、ふざけ（あざれ）合っている。

⑩二十三日。⑪八木のやすのり　と　いふ　人　あり。⑫この　人、国　に　必ず

格助（引用）　動（ハ四・連体）　動（ラ変・終止）　代名　格助（体修）　格助（場所）　副

しも　言ひ使ふ　者　に　も　あら　ざ　なり。⑬これ

副助（強意）　動（ハ四・連体）　助動（断定・連用）　係助（強意）　動（ラ変・未然）　助動（打消・連体・音便略）　助動（伝聞・終止）　代名

ぞ、　たたはしき　やう　に　て、馬のはなむけ　し　たる。⑭守柄　に

係助（強意・係）　形（シク・連体）　格助（手段）　接助（単接）　動（サ変・連用）　助動（完了・連体・結）　助動（断定・連用）

や　あら　む、　国人　の　心　の　常　と　して、「今　は。」

係助（疑問・係）　動（ラ変・未然）　助動（推量・連体・結）　格助（体修）　格助（体修）　助動（断定・連用）　接助（単接）　副　係助（強意）

と　て　見え　ざ　なる　を、心　ある　者　は、

格助（引用）　接助（単接）　動（ヤ下二・未然）　助動（打消・連体・音便略）　助動（伝聞・連体）　接助（逆接・確定）　動（ラ変・連体）　係助（区別）

恥ぢ　ず　に　なむ　来　ける。⑮これ　は、物　に

動（ダ上二・未然）　助動（打消・連用）　格助（状態）　係助（強意・係）　動（カ変・連用）　助動（詠嘆・連体・結）　代名　係助（区別）　格助（対象）

より　て　褒むる　に　しも　あら　ず。

動（ラ四・連用）　接助（単接）　動（マ下二・連体）　助動（断定・連用）　副助（強意）　動（ラ変・未然）　助動（打消・終止）

⑯二十四日。⑰講師、馬のはなむけ　し　に　出でませ　り。⑱あり　と

動（サ変・連用）　格助（目的）　動（尊敬・サ四・已然）　助動（完了・終止）　動（ラ変・連用）　格助（強意）

作者→講師

ある　上下、童　まで　酔ひ痴れ　て、一文字　を　だに　知ら　ぬ　者、

副助（添加）　動（ラ下二・連用）　接助（単接）　格助（対象）　副助（類推）　動（ラ四・未然）　助動（打消・連体）

動（ラ変・連体）

し	が	足(あし)	は	十文字(じふもんじ)	に	踏(ふ)み	て	ぞ	遊(あそ)ぶ。
代名	格助(体修)		係助(強意)		格助(状態)	動(マ四・連用)	接助(単接)	係助(強意・係)	動(バ四・連体・結)

◎口語訳

⑩二十三日。⑪八木のやすのりという人がいる。⑫この人は、国司の役所でも、それほど近くで召し使っていた者ではなかったようである。⑬それなのにこの人がまあ、堂々としてりっぱな様子で、送別をしてくれた。⑭国司の人柄によるのであろうか、任国の人々の気持ちの常として、（国司帰京の際には）「今は（もう顔を出す必要もない）。」とし（思っ）て見送りにも来ないものと聞いているが、真心ある者は、まわりに気兼ねせずに来てくれるのであった。⑮これは、餞別(せんべつ)の品物をもらったことによって褒めているわけでは決してない。

⑯二十四日。⑰国分寺の僧官が、送別の宴においでくださった。⑱そこに居合わせた者は身分が上の者も下の者も皆、さらに子どもまでもが正体なく酒に酔っぱらって、一という文字さえ知らない者が（千鳥足になって）その足は十という文字を踏んで遊び興じている。

◉展開図

作者〈男もすなる日記といふものを、女もしてみむとて、するなり。〉→《女性仮託》

←

某年十二月二十一日戌の刻　＝〔門出の場面〕

「ある人」（前国司＝紀貫之）→〈住む館より出でて、船に乗るべき所へ渡る。〉

↑

見送りに来る人々〈かれこれ、知る知らぬ、送りす。〉→〈夜更けぬ。〉

←

十二月二十二日　＝〔安全祈願・藤原のときざねの餞別〕

〈船路なれど、馬のはなむけす。〉――――《諧謔表現》

〈潮海のほとりにて、あざれあへり。〉――――

←

十二月二十三日　＝〔八木のやすのりの餞別・国司の人柄称揚〕

〈心ある者は、恥ぢずになむ来ける。〉←――→〈物によりて褒むるにしもあらず。〉

←

十二月二十四日　＝〔講師の餞別〕

〈一文字をだに知らぬ者、しが足は十文字に踏みてぞ遊ぶ。〉――――→《諧謔表現》

語句・文脈の解説と脚問・発問

274ページ

L1 男もすなる日記といふもの 男も書くと聞いている日記というもの。「も」は、強意を表す係助詞で、下の「女も」と対応している。「僕も行くから君も行け」というように、強い決意を示して下の「も」を誘い出している（萩谷朴氏『土佐日記全注釈』）。「なる」は、伝聞の助動詞「なり」の連体形で、サ変動詞「す」の終止形に接続している。「日記」は、記録を目的とした男性による漢文日記を指す。仮名で表記する時には「にき」と書くが、実際は促音を入れて「ニッキ」と発音されていた。「といふもの」とあるのは、その実態を知らないことを示したもので、女性の書き手を装うこととつながっている。

L1 女もしてみむとて、するなり 女の私も書いてみようと思って書くのである。「なり」は、断定の助動詞「なり」の終止形で、体言または連体形に接続する。この日記の作者を女性とするための作者による虚構。女性に仮託したのは、当時、漢字（真名）＝男性、仮名＝女性、というような文字使用と性差との関係が前提としてある。男性が記録として記す漢文日記に対して、仮名を使った創作的な日記という新たなジャンルを切り拓くために、女性仮託が行われたと考えられる。これは新たに「仮名表記による文学的な日記」を創造するために仮構された表現技法である。

L2 それの年 ある年。ここは、九三四（承平四）年のこと。「某年」の訓読語。具体的な年次を書かないことによって、記録とは異なる、文学的な表現を意図した方法と捉えることもできる（→発問）。平安時代の仮名日記は基本的に年号を表記しない傾向にあり、『蜻蛉日記』下巻に一例、『更級日記』に一例を数える程度である。なお『貫之集』六九四番歌の詞書には、「延長八年土佐の国に下りて、承平五年に京に上りて……」とあることから、九三〇年から九三四年まで土佐にいたことがわかる。

L2 十二月の二十日あまり一日の日 十二月に入って二十日が過ぎて余り一日目の意で、十二月二十一日を指す。『土佐日記』では、一方で「二十二日」のように名詞として表記される日付もある。この読み方については「はつかあまりふつか」と読むのが慣例だが、「にじふににち」と読むべきだとする説もある。

脚問・発問

274ページ

脚問 「すなる」（1行）の「なる」と「するなり」（1行）の「なり」は、どのように違うか。

答 「すなる」は、サ変動詞の終止形に接続しているので「伝聞」の意味。名詞に続くので連体形。一方、「するなり」は、サ変動詞の連体形に接続しているので「断定」の意味。文末なので終止形。よって、接続と意味と活用形とが異なっている。

《板書例》

す　＋なる
サ変・終止形　助動詞「なり」連体形　伝聞

する　＋なり
サ変・連体形　助動詞「なり」終止形　断定

終止形接続の助動詞「なり」…伝聞・推量
連体形接続の助動詞「なり」…断定

問 「それの年」（2行）と年次をぼかして表記しているのはなぜか。また、これと同じような表現は他にも見られるか。

答 この日記を漢文日記のような事実に忠実

L2　戌の刻　午後八時頃。『延喜式』に記載された一日十二等分の定時法に従えば、現在の午後七時から九時までの二時間が「戌の刻」に相当する。この時刻は「門出」すなわち官舎を出て一時よその出発地に居を移した時間を表す（次項参照）。夜の「門出」は、当時の旅の出発および到着が人目を避けて暗い時分が選ばれたのが慣例であったためであろう。

L2　門出す　仮の出発をする。当時の習慣では、日の吉凶、方位等を占い、一時よそへ移った上で、準備を整え改めて出発するのが通例であった。後文に「住む館より出でて、船に乗るべき所へ渡る。」（274・5）とある。『更級日記』の冒頭部分にも、「上らむとて、九月三日門出して、いまたちといふ所に移る。」とあり、旅立ちに際していったん別の場所へ移っている。

L3　いささかにものに書きつく　少しばかりものに書きつける。「いささかに」は、形容動詞「いささかなり」の連用形。ほんのわずか、少々、の意。「もの」は「紙」のことだが、ここは「少しだけ、ありあわせのものに」書きつけておくという朧化した表現であろう（→発問）。ここまでが、『土佐日記』全体の序にあたる。冒頭の序文はこの作品の文学的な志向と読者意識を示すとともに、この作品が毎日書かれた今日の日記のようなものではなく、まとめて回想して書かれたものであるこ

コラム

漢文日記について

延長九年（承平元年）正月
一日庚申、拝天地四方、大納言以下礼拝、又帥親王入座、停止節会、又無小朝拝、親王・公卿陣頭聊有飲食、（以下略）

これは紀貫之と同時代を生きた藤原忠平の記した漢文日記『貞信公記』の一節である。『土佐日記』の記述からおよそ四年前、元旦の宮中儀式四方拝の様子を記録している。漢文日記は陰陽寮から下賜された具注暦（占いが書き込まれたカレンダー。巻物であった）の余白に書き記すもので、宮中の儀式や会議の様子などを書き留めるのが専らであった。

先例を重んじるこの時代には、このような記録は子々孫々に伝えられ後世の重要な典拠となった。男性貴族は起きたばかりの早朝に前日のできごとを日記に記すことが一般的だったらしい（藤原師輔『九条殿遺誡』）。このような漢文日記の存在を意識しつつ『土佐日記』が創作されたのである。

な記録ではなく、虚構も交えた文学作品として書き始めようとしたため。「ある人」（274・4）とあるのも同様の表現。

（解説）　筆記者を女性に仮託したことと併せて、『土佐日記』が創作的な虚構性を持った日記文学である点を押さえておきたい。

問　**「その由、いささかにものに書きつく。」（2行）は、作者のどのような執筆姿勢を示したものか。**

答　帰京の旅の様子を書き留めようという意志を表すと同時に、この日記が正式な記録ではなく、ほんの戯れに書いたものであることを示している。

脚問　**「ある人」（4行）は誰を指しているか。**

答　土佐守としての任期を終えて帰京する前国司で、これからの旅の長にあたる人物。紀貫之、作者でも可。

（解説）　現実には紀貫之を想起させる者として描かれているが、作中ではその事実を伏せて叙述される。

問　**「し終へて」（4行）の「し」を文法的に説明せよ。また、同じ用法のものを当段落からあと一例指摘せよ。**

答　サ行変格活用の動詞「す」の連用形。
同じ用法…とかくしつつ（274・7）

問　**「知る知らぬ」（5行）と「夜更けぬ」（7**

とを推測させる。

L4 ある人 国司の任を終え、帰京する人物（紀貫之）。前国司で、一行の長にあたる人。女性仮託の日記であることから、筆記者は貫之を思わせる人物を第三者の立場から描写する（→脚問）。具体的人名を記さないのは「それの年」（274・2）と同様の朧化した表現。

L4 県の四年五年 国司（ここは、土佐守）としての任期の四、五年。地方官としての在任期間で、国司は通常四年の任期。平安時代、「あがた」という名詞は、都に対する鄙（田舎・地方）を意味したが、「県召除目」のように地方官や任国を意味する語でもあった。この場合は、「任国での」「地方官としての」という意味。貫之は九三〇（延長八）年に着任、四年四か月間在任し、承平四年十二月に後任者島田公鑒にその任を譲った。後任者の遅れで足かけ五年となった不満を「四、五年」の語句で表したとする説もある。

L4 例のことども 国司の交替時の事務の引き継ぎ。

L4 解由 解由状。前任者の任務完了を証明する公文書。「解由状」は、新任者が発行するもので、前任者に過失や怠慢のなかったことを証明する書類。前任者は「解由状」を京に持ち帰り、勘解由使庁に提出し、それが認められてはじめて任が解かれる仕組みであった。ちなみに過失などがあった場合に発行されるものは「不与解由状」といい、同じく前任者が京へ持ち帰り勘解由使庁に提出し、過失の判定を仰ぎ、場合によっては補塡を求められることもあった。

L5 住む館 国司の官舎。現在の高知県南国市比江にあった。旧、長岡郡国府村大字比江。土佐国府は、高知市の東北約八キロメートル、高知城の東北約一二キロメートルの位置にあったといわれている。

L5 船に乗るべき所 乗船する予定となっている場所。現在の高知市大津。十二月二十七日の条に「大津より浦戸をさして漕ぎ出づ」とある。十世紀当時は、土佐平野の内側まで入り海となっており国府の外港として古浦戸湾に面した良港であったという。

L5 かれこれ、知る知らぬ あの人もこの人も、知っている者も知らない者も。「かれこれ」は、「彼此」の漢文訓読表現であろう。漢文訓読による表記は『土佐日記』の特徴の一つである。「知る知らぬ」は、知る人知らぬ人、の意で準体言用法。対句的な表現を形成している。

L6 年ごろ この数年来。前国司が土佐に着任してからの期間を指す。

行）の「ぬ」の文法上の違いを説明せよ。

答 「知らぬ」…打消の助動詞「ず」の連体形。

「更けぬ」…完了の助動詞「ぬ」の終止形。

（解説） 未然形接続（打消）と連用形接続（完了）の違いに注意しつつ、文脈の流れからも的確に判断させたい。「更け」はカ行下二段活用のため未然形・連用形が同じ活用形となる。

問 「比べつる人々なむ」（6行）の係助詞「なむ」の結びを説明せよ。

答 本来、「別れがたく思ひて」の「思ふ」で結ぶはずが、接続助詞「て」で「思ふ」を受けたため、結びが消滅し（流れ）た形となっている。

（解説） 「ののしる」に係るとする説もあるが、その場合も結びは消滅し（流れ）た形である。

問 「和泉の国までと」（8行）とあるが、「まで」のあとにはどのような言葉（思い）が省略されていると考えられるか。

答 「どうにか無事にたどり着けますように。」「なんとしても平穏に航海できますように。」など。

L6　比べつる人々　親しく交際していた人たち。「くらぶ」は、比較するという意もあるが、ここは親しく交際するの意。

L6　日しきりに　「しきりに」は度重なることをいう。よって、普通に解すれば連日、の意だが、ここは、一日のうちのできごとなので、一日に何人もが何度も訪れては別れを惜しむさまをいったものであろう。

L7　とかくしつつ　見送りの人々が、別れを惜しんで、餞別の品を贈ったり送別の宴を開いたりすること。

L7　ののしるうちに　「ののしる」は、①大きな声や音を立てて騒ぐ。②評判が高い。③相手を悪く言う。現代もっぱら用いられる③の意味での用例は、平安時代には少なく、中世以後、次第に優勢になってくる。ここでは、①の意。旅立つ人と見送る人とが一方では旅の支度をととのえ、一方はその世話を焼くなど、あれこれと忙しく大きな声を上げて立ち騒いでいる。

L8　和泉の国　現在の大阪府南部。和泉の国までの航路が難所であった。室戸岬を越え、紀淡海峡を渡る海路は暴風や波浪、海賊の危険が多い難所であったが、和泉の国は内海に面して海上も平穏で中央に近いため治安が保たれていたので、そこまで行けば安心だと考えられていた。また、和泉の国が紀氏の本拠地の一部であったとの指摘もある。

L8　平らかに願立つ　「平らかに」の解釈について、①直接下に続けて「願立つ」に掛け、「心静かに願を立てた。」ととる説、②「和泉の国まで（平らかに）と」の倒置法として「平穏無事に」の意味とする説とがある。現在、②でとる注釈書がほとんどであり、「平穏無事に帰らせ給え」との神仏への願意を限定したものとみるのが妥当であろう。

L8　藤原のときざね　伝未詳。『土佐日記』における人名呼称は、身分や官職によって、それぞれ書き分けられており、身分の低さゆえに呼び捨てとなったのであろう。土佐国府の役人で、国司の部下であった者か。

275ページ

L1　馬のはなむけ　送別の宴をしたり、餞別を贈ったりすること。「馬のはなむけ」の原義は、旅立つ人の安全を祈って、旅立つ方角へ馬の鼻先を向けてやること（→発問）。上文の「船路なれど」を受けて、「馬には乗らない船旅なのに、馬の鼻を向けている（餞別）ことだ。」という諧謔表現。

L1　上中下　その場にいる者は皆。身分階級の上下にかかわらず、の意。

275ページ

問　「馬のはなむけ」（1行）とは、本来どのような行為であったのか。

答　古代に、旅立つ人の旅中安全を祈って、旅人の乗る馬の鼻先を旅立つ方向へ向けてやったという行為。

問　「今は」（9行）の下に省略されている言葉は何か。現代語で答えよ。

答　「去りゆく人に用はない」「もう国司とも縁がなくなる」「見送りに行く必要はない」など。

問　「心ある者」（9行）の「心」とはどういう心か。

答　真心。誠意。

問　「これは、物によりて褒むるにしもあらず。」（10行）の「これ」とはどういうことか。また、ここでの「物」とはどういう意味か。

答　これ…任国の誠意ある人々が気兼ねをせずに見送りに来てくれたということ。物…餞別の品。贈り物。

問　「出でませり」（13行）は、①誰から誰への敬意か。②敬語の種類を答えよ。③口語訳せよ。

答　①作者から講師への敬意。
②尊敬語。

L1　酔ひ飽きて　「酔ひ飽く」は、すっかり酔っぱらって、いやというほど酔って、という意の複合語。「飽く」は「見飽く」「食べ飽く」などと同じで、すっかり……、十分に……、の意。

L2　あやしく　おかしい。不思議だ。「あやし」には、他に、見苦しい、身分が低い、などの意味がある。

L2　潮海のほとりにて、あざれあへり　腐る（あざる）はずのない（塩分のきいた）潮海の近くでふざけ（あざれ）合っている。「あざれあへり」は、ふざけ合っているの意。「あざる」は人が「ふざける」（戯る）と魚肉などが「腐る」（鯵る）とを掛けている。「塩分がきいて腐るはずがない潮海の近くなのに……」の意を含めた諧謔表現。掛詞を巧みに利用した言葉遊びからは、貫之一流の言語感覚の鋭さがうかがえよう。

L4　八木のやすのり　伝未詳。八木家は土佐の国の名家といわれている。

L5　国　国司の役所。国府。

L6　あらざなり　「あらざるなり」の「る」が「ん」と音便変化し、表記されない形。後出の「見えざなる」も同様。ないようである、の意。「前国司の近くで旅を見聞した女性の手になる日記」という体裁のため、国府での人間関係については、断定せずに伝聞・推定表現を用いた。側近として重用された部下ではなかったようだが、前国司を尊敬するあまり、わざわざ餞別をしに来訪した、という趣旨。

L6　たたはしきやう　「たたはし」は「堂々としてりっぱな。いかめしく、りっぱな」といった意を表す形容詞。他に「讃ふ」から転じた「讃ふべき」さまを示す形容詞とみて「貫之に対するヤスノリの尊崇措く能わずといった様子」と解釈する説（萩谷朴氏）もある。

L7　守柄にやあらむ……恥ぢずになむ来ける　「守柄にやあらむ」は、国司の人柄によるのであろうか。「守柄」は、国司の人柄で、在任中の治績や人望をいい、「守柄にやあらむ」は、「心ある者は、恥ぢずになむ来ける」に係る。「国人の心の常……見えざなるを」は挿入句で、「任国の人々の一般的な気持ちとしては去りゆく国司には用がないとして見送りには来ないのが常なのに」との内容ととる。対して、「心ある者」つまり「真心ある者」は、まわりに気兼ねせずに来てくれるというのである（→発問）。間接的に、土佐守の在任中、貫之が善政を敷き、人々から慕われていたことを示しているのだろう。このような自賛も、第三者の女性に仮託したがゆえに書けたことも押さえておきたい。当時の国司すなわち受③おいでくださった。

問　**「足は十文字に踏みて」（15行）とは、どのようなことを表す言葉か。**

答　酒に酔って正体不明となり、おぼつかない足どりで歩いているさま（いわゆる千鳥足の状態）。

・図版解説・

●船出（教科書275ページ）

菅原道真を祭神とする京都の北野天満宮の縁起を記した国宝の絵巻。鎌倉時代前期の成立で画は伝藤原信実（のぶざね）。この画面は巻四にあり、大宰府に配流が決まった道真が大阪から配所に向けて出港したところ。中央と船尾に屋形、中央に五人の漕ぎ手、帆柱は倒されていて、舵は船尾に描かれている。北野天満宮所蔵（同提供）。

領層は強欲にして吝嗇で知られ、在任期間中に無法なとりたてに明け暮れ私腹をこやす者も多かったといわれる。そうした経済的理由から都に帰らず土着した国司もいた。そのような輩と一線を画しようという思いがこのような表現に表れていると考えることもできよう。

L10　物によりて褒むるにしもあらず　餞別としてよい品物をもらったことによって褒めているわけでは決してない。これも、一般的な国司の貪欲さに対する批判的な言葉であろう。

L12　講師　国分寺の僧官で、国内の僧尼を管理し、仏の教えを講じた者。もとは国師といい、文武天皇の七〇二（大宝二）年に初めて置かれた。その後、七九五（延暦一四）年に講師と改称、各国に一人、任期六年と定められた。延暦寺その他諸大寺の上座寺主等を経た者のうち、四十五歳以上の人格、見識とも確かな者が選任された。一国内においては、国司に次ぐ地位を保っていたらしい。土佐の国にあって、講師の居所である国分寺は国司の官舎からは約一キロメートル、一行の現在地大津からは約四・五キロメートル離れていたと考えられている。

L13　出でませり　おいでくださった。「り」は完了の助動詞「り」の終止形。敬語使用の初出箇所。『土佐日記』の中では、他人への敬語は少なく、特に「出でます」のように最上級の敬意を示す例は他にない。ここは、講師への敬意を表しているが、身分高く人徳もある僧官の長が、わざわざ遠くから餞別においでくださった、と感謝の気持ちがこめられているものとみたい（→発問）。

L14　酔ひ痴れて　酔って正体不明となって。「痴る」は、ぼける、心のはたらきが鈍る、の意。

L14　一文字をだに……十文字に踏みてぞ遊ぶ　（手では）「一」という文字さえ知らない者が、（足で）「十」という文字を書いているという諧謔表現。酒に酔って正体不明となり、おぼつかない足どりで歩いているさま（いわゆる千鳥足）を洒落を用いて表現した（→発問）。

L15　しが足は　その足は。「し」は「其（れ）」と同様の代名詞、「が」は連体格を表す助詞である。なお、この前後を「知らぬ者しが、足は」と本文を作り、「し」を強意を表す副助詞、「が」を主格を表す格助詞ととる説もあり、このような形で本文を作っている注釈書も少なくない。ただし、この時代の前後を見渡しても、このような使われ方をする「しが」の用例は他に見当たらない。本教科書では、上代の用例が多い古風な言い方ではあるものの、「日本古典文学全集」「新潮日本古典集成」「新日本古典文学大系」「新編日本古典文学全集」など近時の注釈書が採用している「しが足は」と採る説に拠った。この前後を「知らぬ物師」として、「一文字さえ知らぬ芸人が、その足は」ととる説もあり（「講談社学術文庫」）、（「新日本古典文学大系」）は「しが足」と本文を作りつつ、この意も織り込まれているとする。そこまで考える必要があるかどうかだが一説として紹介しておきたい。

＊語句

ののしる　［自ラ四］①大声で騒ぐ。騒ぎたてる。②盛んに評判が立つ。評判が高い。③勢力をふるう。威勢がよくなる。④大きい音を立てる。大きい声で鳴く。

平らかなり　［形動ナリ］①高低がなく、平らな様子。②穏やかである。安らかである。③無事である。平穏である。

飽く　［自カ四］①満ち足りる。満足する。②十分すぎていやになる。あきる。③（動詞の連用形について）十分…する。すっかり…する。

コラム

土佐日記の原本について

『土佐日記』の紀貫之自筆本は鎌倉時代の初めには蓮華王院の宝蔵に納められ、さらに室町将軍家に伝わり、少なくとも九代将軍足利義尚の時代までは現存していたらしい。巻子本仕立てであったと記録されている。室町時代まで自筆本が伝わったのは、紀貫之を尊崇する後世の人々が多く、その自筆本に価値が置かれていたからだろう。『源氏物語』や『枕草子』の自筆本がまったく伝わっていないのと対照的であるが、これは当時の女性作家が置かれていた文化的な地位の低さと関わっているのである。さて、蓮華王院に伝わっていた自筆本を藤原定家と為家という親子がそれぞれ一二三五（文暦二）年、一二三六（嘉禎二）年に書写している。現在は為家が書写した為家書写本（現在学校法人大阪青山学園所蔵）か、その正確な書写本である青谿書屋本（東海大学付属図書館蔵、桃園文庫旧蔵）かを底本として本文を校訂することが多い。ちなみに定家が記した定家書写本（前田育徳会尊経閣文庫蔵）は冒頭部をそのまま翻字すると、「をとこもすといふ日記といふ物を、むなもして心みむとてするなり」となっている。なぜ同じ紀貫之自筆本を書写しながら、このような違いが生じたのだろうか。老眼が進んだ定家の身体上の問題に理由を求めるなど諸説あるが、はっきりしたことはわからない。

心許なし。

四日。風吹けば、え出で立たず。

このような日付の連続（承平五年正月二日から四日まで）は、単なる暦の意味を越えている。こうした日付の連なりは、風のためにかの地にとどまらなければならなかった停滞感と無念さを表象しているといえるだろう。日付のあり方も漢文日記とは変質していることが確かめられる。

◉鑑賞

『土佐日記』の創作は文学史の上で重要な意義をもっていた。それは文学性の高い仮名日記の創造であり、日記文学のまさに出発点を示していた。漢文日記のような記録性を拒絶したところから、この『日記』は始まっている。「男もすなる日記といふものを、女もしてみむとて、するなり。」という冒頭の一文は、この作品が創作性の強い文学として記されていることを女性仮託という虚構とともに宣言するものであった。

そのような文学史的意義とともに、自らを女性に仮託したことは、官人としての紀貫之をその制約から解放することにもつながっただろう。漢文日記はまさに官人として儀式や政務を記録するものであった。この冒頭部に存在する朧化された年次の表現はその解放感と無縁でないだろうし、亡児哀傷などの私的な感情も漢文日記に直接吐露されるようなものではなかった。人間の内面を風刺的に記す、批判精神や歌論的な展開も仮名日記ゆえに表現できたものであろう。『土佐日記』は旅の行程を記しながら、移りゆく心情の描写とともに多様な主題を抱え持つこととなった。同時に、女性仮託の裏で、民から慕われる清廉な役人としての貫之の姿が表現されていることも見逃せない。ここに官人である自己から決して離れていない、女性仮託の一筋縄ではいかない側面が見えてくるだろう。

さらに漢文日記との関わりについてひと言触れておく。『土佐日記』は漢文日記のように日付を全て備えており、日記という日次（ひなみ）の記としてのあり方を堅持している。その意味で、漢文日記と同じ型を保っているのだが、ただし例えば、次の例。

二日。なほ、大湊に泊れり。講師、物、酒おこせたり。

三日。同じ所なり。もし風波の、しばし、と惜しむ心やあらむ、

学習の手引き

一 ※次の傍線部の係助詞に対する結びについて説明してみよう。
①よく比べつる人々なむ、（274・6）
②守柄にや（275・7）
③恥ぢずになむ（275・10）

【解答例】
①結びは消滅（流れ）。
②すぐあとの「あらむ」の「む」で結んでいる。「む」は、推量の助動詞「む」の連体形。
③すぐあとの「来ける」の「ける」で結んでいる。「ける」は詠嘆の助動詞「けり」の連体形。

〔解説〕
①「なむ」は強調の意味で、「よく比べつる人々」を強めている。結びについては、本来、「別れがたく思ひて」の「思ふ」で結ぶはずが、接続助詞「て」で「思ふ」を受けたため、消滅し（流れ）た。
②「や」は疑問の意味。「…や…む」で推量を含む疑問文。
③「なむ」は強調の意味で、「恥ぢずに」を強める。「なむ」で文脈に緊張を与え、「心ある者」が「恥ぢずに」来てくれたことを強調し、詠嘆をこめて文を結んでいる。

二 ※次の三つの表現はどのようなところがおもしろいのか、説明してみよう。
①船路なれど、馬のはなむけす。（274・8）
②潮海のほとりにて、あざれあへり。（275・2）
③一文字をだに知らぬ者、しが足は十文字に踏みてぞ遊ぶ。（275・14）

【解答例】
①「船路」で「馬」の旅ではないのに、送別の宴を「馬のはなむけ」をする、として慣用句と現実との言葉の相違を楽しんでいる。
②「あざる」の掛詞を用いて、「鯵る（あざる＝ふざける）」はずのない潮海なのに、「戯れ（あざる＝ふざける）」合っているとして言葉遊びを楽しんでいる。
③「一」という文字を知らぬ者が、千鳥足で「十」という文字を書くという現実と文字との対照がおかしみを誘っている。

〔解説〕
①「（馬には乗らない）船旅なのに、馬の鼻を向けている。」という意味。「馬」を使った旅の慣用表現を引用しつつ、「船路」で「馬」の必要がないのに、送別の宴を「馬のはなむけ」というのは不思議なことだ、と読み手に表現のおもしろさを訴えかけている。
②「潮海の近くなのに、あざれ合っている」と表現することで、「あざる」に「ふざける」（A）と「腐る」（B）の二つの意味を含ませ、一方で潮海の近くで酔って「ふざけ合っている」人々の様子を描写しながら、もう一方では、「（塩分がきいて腐るはずがない）潮海の近くなのに「腐る」とは不思議なことだ、という意味をこ

める。掛詞を用いて、「あざる」という言葉の両義性を現実の場面に合わせて同時に表すおもしろみをねらった表現。

（Aの意）　あざる（戯る＝ふざける）
潮海のほとりにて、あざれ〈掛詞〉あへり
（Bの意）　〈対義〉　あざる（鯘る＝腐る）

③（手では）「一」という文字さえ知らない者が、（足で）「十」という文字を書いているという意味。酒に酔って正体不明となり、おぼつかない足どりで歩いているさま（いわゆる千鳥足）を「一」と「十」という文字に着目して言葉遊びとした諧謔表現。ここでも、現実描写（足どり）を文字（十）の視覚的側面に置き換えている言語感覚の鋭さに注目したい。任期を終えて土佐の国の人々と別れを惜しむ場面だが、涙っぽい湿った雰囲気ではなく、明るくユーモラスな表現によって、諧謔味あふれる場面となっている。

こうした諧謔表現の意味については、例えば、社会風刺を広く受け入れさせるための方法とみる向きがある。『土佐日記』には、女性仮託や歌論の展開、さらに戯曲構成など作者の文学的手法を存分に試す作品としての性格が随所にみられる。諧謔表現についても、各場面での緊張をほぐし、色彩を添えるものとして、まず、そのおもしろさを十分に味わうべきであろう。

三※作者が、この日記を女性の立場で書き記した理由は何か、調べてみよう。

【解答例】
その理由は、当時の日記が漢文で書かれたものが一般的で、これは男性貴族が記録として記したものであったことと関係がある。漢字を使っていた男性たちに対して、女性たちは仮名を使うことで、繊細な心情を表現していた。

そこで作者は、女性の立場で「日記」を書くことによって、仮名を使い、繊細な心情を吐露する、創作性が高い日記文学を執筆しようとした。

【発展解答例】
当時の日記は男性が漢文で記したもので、官人としての記録という性格が強かった。そこで、作者は第三者としての女性筆者に仮託し繊細な心情が表現できる仮名を使うことによって、公的な身分から解放され、私的な感情を自由に表現し、創作的な日記文学を執筆することができた。

【解説】
当時の一般的な日記のあり方、男性と女性の文字使用の違いなどを理解させることで、女性仮託の文学史的意義の理解までつなげてゆきたい。発展解答例では官人としての作者という観点を加えて、作者の内面の問題として、女性仮託の問題を考える。便覧や図書館の事典類、関係図書などを参照させたい。

忘れ貝

◉大意

二月四日は、船頭が「今日は、風や雲の様子が大変悪い」と言って船を出さずに終わったが、一日中波も風も立たない。この船頭は、天候の予測もできぬくらいの、愚か者だ。

この港の浜辺には、いろいろの美しい貝や石などがたくさんある。それだからこそ、ただもう失った子どもだけが恋しくてならない。亡くなった女の子のためには、きっと親は、分別をなくして子どものようになってしまうのだろう。「玉というほど美しい子でもなかっただろう」と他人は言うだろうか。でも、「死んだ子は、顔立ちがよかった」と言うようなこともある。

◉全体の構成

段落	ページ・行	大意
第一段	初め〜277・3「かたゐなりけり。」	**愚かな船頭** （二月）四日、船頭の予想では悪天候だというので出航しなかったが、一日中平穏だった。この船頭は、天気の予測もできぬ愚か者だ。
第二段	277・4「この泊の」〜277・10「言ふやうもあり。」	**子を恋うる思い** この港の浜辺で、いろいろの美しい貝や石などを拾って、土佐で亡くした女児への思いを忘れたいと願う一方、せめて子を恋うる情だけでも形見にしたいという、二つに揺れ動く。
第三段	277・12「なほ、」〜終わり	**停泊する嘆き** 女が、和泉の国で動けないのを嘆いて歌を詠んだ。

◉品詞分解

❶四日(よか)。❷楫取(かぢと)り、「今日(けふ)、風雲(かぜくも)の気色(けしき)はなはだ悪(あ)し。」と言(い)ひて、船(ふね)

格助(体修)　副　形(シク・終止)　格助(引用)　動(ハ四・連用)　接助(単接)

出(い)ださず なりぬ。❸しかれども、ひねもすに波風(なみかぜ)立(た)たず。

動(サ四・未然)　助動(打消・連用)　動(ラ四・連用)　助動(完了・終止)　接続　副　動(タ四・未然)　助動(打消・終止)

❹この楫取(かぢと)りは、日(ひ)もえ計(はか)らぬかたゐなり

代名　格助(体修)　係助(区別)　係助(強意)　副　動(ラ四・未然)　助動(打消・連体)　助動(断定・連用)

けり。

助動(過去・終止)

❺この泊(とまり)の浜(はま)には、くさぐさのうるはしき貝(かひ)、石(いし)など

代名　格助(体修)　係助(体修)　格助(場所)　係助(区別)　格助(体修)　形(シク・連体)　副助(例示)

多(おほ)かり。❻かかれば、ただ昔(むかし)の人(ひと)をのみ恋(こ)ひつつ、船(ふね)なる人(ひと)

形(ク・終止)　接続　副　格助(体修)　格助(対象)　副助(強意)　動(ハ上二・連用)　接助(継続)　助動(存在・連体)

の詠(よ)める、

格助(主格)　動(マ四・已然)　助動(完了・連体)

❼寄(よ)する波(なみ)打(う)ちも寄(よ)せなむわが恋(こ)ふる人(ひと)忘(わす)れ貝(がひ)

動(サ下二・連体)　動(タ四・連用)　係助(強意)　動(サ下二・未然)　終助(願望)　代名　格助(体修)　動(ハ上二・連体)

下(お)りて拾(ひろ)はむ

動(ラ上二・連用)　接助(単接)　動(ハ四・未然)　助動(意志・終止)

と	言へ	れ	ば、	ある	人の	堪へ	ず	して、	船
格助(引用)	動(ハ四・已然)	助動(完了・已然)	接助(順接・確定)	連体	格助(主格)	動(ハ下二・未然)	助動(打消・連用)	接助(単接)	

の	心やり	に	詠め	る、
格助(体修)	格助(目的)	動(マ四・已然)	助動(完了・連体)	

❽忘れ貝	拾ひ	しも	せ	じ	白玉	を	恋ふる	を
動(ハ四・連用)	副助(強意)	動(サ変・未然)	助動(打消意志・終止)		格助(対象)	動(ハ上二・連体)	格助(対象)	

だに	も	形見	と	思は	む
副助(限度)	係助(強意)	格助(引用)	動(ハ四・未然)	助動(意志・終止)	

と	なむ	言へ	る。
格助(引用)	係助(強意・係)	動(ハ四・已然)	助動(完了・連体・結)

◎口語訳

❶(二月)四日。❷船頭が、「今日は、風や雲の様子が大変悪い。」と言って、船を出さずに終わった。❸それなのに、一日中波も風も立たない。❹この船頭は、天気の具合も予測できない愚か者だった。❺この港の浜辺には、いろいろの美しい貝や石などがたくさんある。❻それだから、ただもう亡くなった人だけを恋しがって、船の中の人が詠んだのは、

❼浜辺に打ち寄せてくる波よ、どうか(あの忘れ貝を)打ち寄せてほしい。そうしたら、私が恋い慕う人(亡くなった子ども)を忘れるという、その忘れ貝を、私は船から下りて拾おう。

と詠んだところ、そこにいる人が堪えきれずに、船旅の間の気晴らしに詠んだのは、

❽(あの子を忘れるための)忘れ貝なんか、拾うこともすまい。せめて、白玉のようなあの子を恋しく思う気持ちだけでも、形見と思うことにしよう。

と詠んだのだった。

❾女子（をみなご）　の　ため　に　は、　親（おや）　幼く（をさな）　なり　ぬ　べし。
格助（体修）　格助（目的）　係助（区別）　形（ク・連用）　動（ラ四・連用）　助動（強意・終止）　助動（推量・終止）

❿「玉（たま）　なら　ず　も　あり　けむ　を。」　と　人（ひと）
助動（断定・未然）　助動（打消・連用）　係助（強意）　動（ラ変・連用）　助動（過去推量・連体）　接助（逆接・確定）　格助（引用）

言（い）は　む　や。　⓫されども、　「死（し）　し　子（こ）、顔（かほ）　よかり　き。」
動（ハ四・未然）　助動（推量・終止）　係助（疑問）　接続　動（ナ変・連用・音便略）　助動（過去・連体）　形（ク・連用）　助動（過去・終止）

と　言（い）ふ　やう　も　あり。
格助（引用）　動（ハ四・連体）　係助（添加）　動（ラ変・終止）

⓬なほ、　同（おな）じ　所（ところ）　に、　日（ひ）　を　経（ふ）る　こと　を　嘆（なげ）き　て、　ある　女（をむな）
副　形（シク・連体）　格助（場所）　格助（対象）　動（ハ下二・連体）　格助（対象）　動（カ四・連用）　接助（単接）　連体

の　詠（よ）め　る　歌（うた）、
格助（主格）　動（マ四・已然）　助動（完了・連体）

⓭手（て）　を　漬（ひ）て　て　寒（さむ）さ　も　知（し）ら　ぬ　泉（いづみ）　に　ぞ
格助（対象）　動（タ下二・連用）　接助（単接）　係助（強意）　動（ラ四・未然）　助動（打消・連体）　格助（場所）　係助（強意・係）

汲（く）む　と　は　なし　に　日（ひ）ごろ　経（へ）　に　ける
動（マ四・終止）　格助（引用）　係助（区別）　形（ク・終止）　格助（状態）　動（ハ下二・連用）　助動（完了・連用）　助動（詠嘆・連体・結）

◎口語訳

❾（亡くなった）女の子のためには、きっと親は（幼い子どものように）分別をなくしてしまうに違いない。
❿「玉というほど（美しい子）でもなかったろうに。」と他人は言うだろうか。⓫でも、「死んだ子は、顔立ちがよかった。」というようなこともある。
⓬やはり、同じ場所で、（むなしく）日を過ごすことを嘆いて、ある女の詠んだ歌は、
⓭手を浸しても冷たさを感じない（名ばかりの）泉ではないが、（この）和泉の国で水を汲むというわけでもなく（無駄に）幾日も過ごしてしまったことよ。

◉展開図

二月四日　九三五（承平五）年＝〔和泉にて。〕
←
船頭の言葉〈今日、風雲の気色はなはだ悪し。〉→〈ひねもすに波風立たず〉
船頭を批判
←
船の中の人　〔失った子どもが恋しい。〕＝〔いろいろの美しい貝や石がたくさんある港の浜辺。〕
〈寄する波打ちも寄せなむわが恋ふる人忘れ貝下りて拾はむ〉
←
ある人　＝〔亡くなった女の子のために親は分別をなくしてしまうに違いない。〕
〈忘れ貝拾ひしもせじ白玉を恋ふるをだにも形見と思はむ〉
忘れ貝＝恋しい人を忘れる貝
←
ある女　〔同じ場所で日を過ごすことを嘆いている。〕
〈手を漬てて寒さも知らぬ泉にぞ汲むとはなしに日ごろ経にける〉

語句・文脈の解説と脚問・発問

277ページ

L1　四日　九三五（承平五）年二月四日のこと。

L1　楫取り　船頭、舵取り。舵を取って船の方向を定める人。

L1　風雲の気色はなはだ悪し　風や雲の様子が大変悪い、の意。「はなはだ」は漢文の「甚」を訓読したもので、和文の「いと」「いたく」「いみじく」などに当たる。「悪し」は、具合が悪い、の意。この時代は身分が低く教養がなかった船頭にふさわしくない漢文訓読語を使っているのは、船頭の威張った、横柄な姿を描くためであろう。「はなはだ悪し」という断定的な口調も同様で、もったいぶった様子を描き効果的である。その船頭の予想が的中しなかったので、「……かたゐなりけり。」と、後文で強い言葉で批判している。「あし」は他と比べてではなく、本質的に悪いこと、劣っているものをいう。「わろし」は普通よりは悪いこと、劣っていることを表す。「よし」と「よろし」との関係も同様。

《板書例》

よし　⇕あし
よろし⇕わろし

L2　しかれども　ところが、それなのに、の意で逆接の接続詞。漢文の「然」「然而」を訓読した表現。和文では「されど」「されども」「さはいへど」に当たる。楫取りが「はなはだ」などと肩肘張った物言いをしたことに対し、「しかれども」と堅苦しい言葉で皮肉っぽく記している。

L2　ひねもすに　一日中。「ひねもす」と同じ。「ひねもす」は「ひすがら」と同じで、終日、朝から晩まで。対義語は「よもすがら」。

L2　日　天気。船頭の天気の予測は、外れた。

L3　かたゐ　愚か者。人をののしっていう言葉。もとの意味は、乞食。ここでは、船頭をののしった言葉。天候の予想もできない船頭に対して、その横柄な態度もあって怒りが頂点に達した。この港に留まったまま四日目を迎えており、帰京の旅程が遅々として進まないことへのいらだちもあって、このような感情的で卑俗な言葉となったのであろう。

脚問・発問

277ページ

問　**「この楫取りは、日もえ計らぬかたゐなりけり。」（2行）と作者が批判しているのはなぜか。**

答　「学習の手引き」二参照。

問　**「昔の人」（5行）のことを指している言葉を、本文中から全て抜き出せ。**

答　「わが恋ふる人」（6行）、「白玉」（8行）、「女子」（9行）

問　**「寄する波打ちも寄せなむ」（6行）を口語訳せよ。また、「なむ」について文法的に説明せよ。**

答　口語訳…寄せてくる波よ。どうか忘れ貝を打ち寄せてほしい。
なむ…他に対する願望の意を表す終助詞。
（解説）「なむ」は活用語の未然形に接続する。

脚問　**「白玉」（8行）とは何をたとえたものか。**

答　亡くなった女児をたとえている。
（解説）「白玉」は真珠のこと。白い美しい玉のこと。

問　**「寄する波……」（6行）の歌と「忘れ貝……」（8行）の歌に表された感情を比較せ**

L4　この泊　この港の意。二月一日の条に「今日は箱の浦（今の大阪府阪南市箱作付近の港）といふ所より綱手曳きてゆく。……にはかに風波高ければ留りぬ。」とある。その箱の浦付近の浜であろう。

L4　くさぐさ　いろいろ、さまざま、種々、の意。

L4　うるはしき　「うるはし」は、壮麗だ、端正だ、が本来の意味であるが、ここでは美しい、の意。

L4　貝、石など多かり　美しい貝や石は、当時の子女の恰好の遊び道具だった。貝合のような遊びは子どもの頃から行われていたことであろう。「多かり」は「多し」の連用形にラ変動詞「あり」がついた「多くあり」の変化した形で、形容詞「カリ活用」の終止形。

L4　かかれば　このようであるから、そこで、の意。「かくあれば」の変化した形。女児が喜びそうな美しい貝や石が多くあるから。

L5　昔の人　亡くなった人。土佐の国で亡よ。

答　「学習の手引き」三参照。

問　**「親幼くなりぬべし」（9行）と言っているのはなぜか。**

答　亡き女児を思うあまり、一方では忘れ貝を拾っていっそのこと忘れてしまいたいと言ったり、一方では忘れ貝を拾わず、せめてその思いだけでも形見としたいと言ったりする。このような分別を失った親心を、まるで幼い子どものようだ、と言った。

問　**「玉ならずもありけむを」（9行）とは、どういうことか。**

答　亡き子は玉というほどの器量でもなかったろうに、ということ。

（解説）　あとの「死し子、顔よかりき」（10行）と対応する表現である。

問　**「手を漬てて……」（13行）の歌には、どのような気持ちが歌われているか。**

答　一日も早い帰京を心の底から願っているのに、いつまでも同じ所に足止めをくって、日数を数えるしかない日々の物憂さとじれったさ。

問　**「手を漬てて……」（13行）の歌から縁語を指摘せよ。**

答　「漬て」と「汲む」が「泉」の縁語。

コラム

船旅と船頭

『土佐日記』に記された船旅の中で、帆を上げた風力による航海は、はっきりと書かれているのは一日だけで、大部分は人力で漕いでいたと考えられる。しかも五十五日の行程中、実際に船を動かせたのは、十八日に過ぎなかった。ここに当時の航海の難しさが見いだせよう。遣唐使船がたびたび遭難、難破した例からも、航海技術がいかに未発達であったかがうかがえる（奈良、平安時代の遣唐使船十八回渡航のうち、無事戻ってきたのは八回だったといわれる）。しかも紀貫之の乗った船はせいぜい三十人くらいが乗れる小さな船であったと思われる。

このような情況から、船旅は波任せ、風任せとなり、天候の変化を読むことが大切とされた。航海の成否は、船頭の判断に委ねられた。その分、船頭の権限は高められたはずである。『土佐日記』に登場する船頭が自信満々で横柄な印象を与えるのも、旧国守といえども最終的には自分の判断に従わざるを得ないという自信がなせるところではないか。いささか山師的な雰囲気が漂う船頭に、海上で生殺与奪を握られているといういらだちが、天候の判断ミスに対する卑俗なまでの怒りの言葉となったのであろう。

くした幼い娘。（承平四年）十二月二十七日の条に「京にて生まれたりし女子、国（＝土佐の任国）にてにはかに失せにしかば……」とある。

L5　船なる人　船の中にいる人、の意。「なる」は存在の助動詞「なり」の連体形。亡き娘の親。次の「ある人」を娘の父（貫之）とあれば、ここは娘の母（貫之の妻）を指すことになる。「寄する波……」「忘れ貝……」の二首は『古今和歌六帖』（平安時代中期の私撰集。成立時、編者ともに不詳）には、ともに紀貫之の作として収められている。二首の歌が正反対の見方から亡児哀傷の気持ちを深めていることから、「船なる人」「ある人」ともに、紀貫之の分身と考えることもできよう。

L6　寄する波打ちも寄せなむ　寄せてくる波よ、どうか（忘れ貝を）打ち寄せてほしい、の意。「打ち寄す」の間に挿入された「も」は強意の係助詞。（なお、この「も」を副助詞、間投助詞とみる説もある。）「なむ」は未然形に接続して、他に対して願望の意を表す終助詞。

L6　わが恋ふる人　私が恋い慕う人。亡き女児を指す。

L6　忘れ貝　二枚貝の離れた一片。これを拾うと恋しい人を忘れるという。「忘れ」は「恋ふる人忘れ」と「忘れ貝」の二つを掛けている。「忘れ」をはさんだ前後の部分は、いっそのこと忘れ貝を拾って亡き女児を忘れてしまいたいと、亡児を思う心の苦しさを詠んでいる。「忘れ貝」は『万葉集』の坂上郎女の歌にも「我が背子に恋ふれば苦し暇あらば拾ひて行かむ恋ひ忘れ貝」（巻六、九六四）と詠まれている。

L7　ある人の堪へずして　「ある人」は娘の父のことか。先の「船なる人」と同様に、客観化されているが、貫之自身の分身であると考えられよう。この場合の「ある」は連体詞の「或る」とも、動詞「在る」（そこにいる）とも、どちらでも解釈可能であろう。「堪へずして」は、堪えきれずに、黙っていられなくなって、の意。

L7　船の心やり　船旅の間の気晴らし。

L8　拾ひしもせじ　拾うこともすまい、の意。「しも」は強意の副助詞。副助詞「し」に係助詞「も」が付いてできたもの。「せ」はサ変動詞「す」の未然形。「じ」は打消意志の助動詞。

L8　白玉を恋ふるをだにも　せめて白玉のようなあの子を恋しく思う気持ちだけでも、の意。「だに」は最小限度の希望を表す副助詞で、せめて……だけでも、の意。

L8　形見と思はむ　形見と思うことにしよう、の意。「形見」は思い出の種となる遺品、記念の品。前の「寄する波……」の歌を受けて、「忘れ貝」を拾って忘れようとするのではなく、白玉のようなかわいい亡き女児を忘れず恋しく思うその気持ちを、記念の品にしようというのである。

L9　親幼くなりぬべし　「ぬべし」は、きっと……なってしまうのだろう、の意。完了の助動詞「ぬ」が強意を表す用法。亡き女児を思うあまり、一方では忘れ貝を拾っていっそのこと忘れてしまいたいと言ったり、もう一方では忘れ貝を拾わず、せめてその思いだけでも形見としたいと言ったりする。このような分別を失った親心を、まるで幼い子どものようだ、というのである。

L9　玉ならずもありけむを　玉というほどではなかったろうに、の意。親は亡き女児を玉にたとえたけれども、他人から見れば玉というほどのこともなかったろうに。「も」は強意の係助詞。「を」は逆接の接続助詞（間投助詞、終助詞とする説もある）。

L10　人言はむや　他人は（陰口を）言うだろうか。「や」は疑問の意の係助詞で、終助詞的用法。

L10　死し子　死んだ子。「死にし子」の「に」

が「ん」と音便変化し、表記されない形か。「死にし子」→「死んじ子」→「死し子」と変化したものであろう。ここの「死し子、顔よかりき」は、後世にも「死ぬ子みめよし」とあるように、子を失った親心をいう当時のことわざであったのだろう。

L10 と言ふやうもあり というようなこともある、の意。「やう」は形式名詞。

L13 漬てて ぬらして、（手を）水につけて、の意。「漬て」は下二段動詞「漬つ」の連用形で他動詞として用いられる。ぐっしょりぬらす、ぐっしょりぬれる。水につける、水につかる、の意。ちなみに、自動詞（「水につかる、水に浸る」）としても使われ、その場合は四段活用、平安時代中期以降は上二段活用で用いられた。

L13 泉にぞ汲むとはなしに 泉で水を汲むこともなく。「泉」に、地名の和泉を掛けている。和泉の国で、何もしないで、無駄に過ごしたことをいう。「漬て」「汲む」は「泉」の縁語。現在、一行は和泉の国（今の大阪府南部）にいる。

L13 日ごろ経にける 幾日も過ごしてしまったことよ、の意。「日ごろ」は、幾日も、の意。「ける」は詠嘆の助動詞の連体形。係助詞「ぞ」の結び。

＊語句

ひねもす ［副］朝から晩まで。一日中。

くさぐさ ［名］物の種類が多いこと。いろいろ。さまざま。

うるはし ［形シク］①壮麗だ。②容姿が整っていて美しい。③乱れたところがなく、きちんとしている。④心が誠実である。⑤あらたまっている。⑥仲むつまじい。⑦正しい。⑧まちがいない。

漬つ ［一］［自タ四］［自タ上二］水につかる。ぬれる。［二］［他タ下二］水につける。濡らす。

◉鑑賞

自信たっぷりに天候を予測し、この日も留まることを決断した船頭であったが、結果は平穏な一日となり、波風が強くなることはなかった。帰京が遅々として進まない焦燥の中で、船頭に対する怒りが「かたゐなりけり」という卑俗な非難の言葉となって爆発している。続く場面では、美しい忘れ貝を目のあたりにした時に浮かび上がった亡児哀傷の思いが、哀調を帯びた二首の和歌で歌われる。それぞれ正反対な発想で歌われ、二首連なることで、娘への揺れ動く強い愛情を描いている。『古今和歌六帖』に両首とも紀貫之の作と載っているように、詠み手である「船なる人」「ある人」は、ともに貫之の分身と見なすべきであろう。船頭を批判した俗っぽい表現とは対照的だが、ここで歌われた哀切な親心は分別を失うほど強いもので、人間らしい感情を描いているという点では共通している。また船頭の判断ミスのおかげで、忘れ貝に接することができたことも皮肉といえなくもない。最後に、この地に留まる空しさを詠んだ女の歌を配し、二月四日の記事は終わる。人間らしい感情表現が全体を貫き印象的だが、結局は船頭に身を委ねざるを得ない一行の様子がうかがえておもしろい。

学習の手引き

一❖次の傍線部の違いを説明してみよう。
①寄する波打ちも寄せなむ（277・6）
②忘れ貝……と思はむ　となむ言へる。（277・8～9）

【解答例】
①「なむ」は「寄せ」（サ行下二段活用動詞「寄す」の未然形）に付いて、他に対する願望の意を表す終助詞。
②「なむ」は係助詞で、結びは「る」（完了の助動詞「り」の連体形）。

【解説】
①は、波に向かって願っている。打ち寄せてほしい、の意。
②は、いろいろな語に接続して、その語を取り立てて文意を強調する助詞。係り結びを作り、文末の活用語を連体形で終止させる。
係助詞「なむ」は、同じ係助詞の「こそ」や「ぞ」などに比べて、語勢、強調の度合がやや軽く、相手にやわらかに説明するニュアンスをもつ語であるということを説明してもよい。

二❖「この楫取りは、……なりけり。」（277・2～3）と作者が批判しているのはなぜか、説明してみよう。

【解答例】
船頭が天気を読み違えたために船を出さず、この地に留まることになり、帰京が遅れることになったため。

【発展解答例】
横柄で威張った船頭がそうした自信満々な態度にもかかわらず天気を予測し損ねたために、この地に留まり帰京が遅れるはめとなったから。

【解説】
一日も早く帰京したいと思っているのに楫取りの判断ミスから足止めを余儀なくされたことへのいらだちが、この強い非難の根底にあることに注意を向けたい。発展解答例では、横柄な船頭に対する不快感が強い口調につながったことを加えて説明してみたい。

三❖「寄する波……」（277・6）と「忘れ貝……」（277・8）の歌には、それぞれどのような心情がこめられているか、話し合ってみよう。

【解答例】
「寄する波……」の歌…忘れ貝を拾って、亡き児への思いを断ちきりたいということで、いっそ忘れてしまわなければ、とてもやりきれないほどの悲しみを表現している。
「忘れ貝……」の歌…「白玉」に愛児をたとえ、あの子への恋しさを片時も忘れずにいよう、と亡くなった子どもを思い出す苦痛さえも子どもの形見であるという形で、悲しみを表現している。

【発展解答例】
「寄する波……」の歌…忘れ貝を拾って、亡き児への思いを断ちきりたいということで、いっそ忘れなければ、とてもやりきれないほどの悲しみを表現している。亡き児への哀惜の思いを逆説的に表現している。

「忘れ貝……」の歌…「白玉」に亡き児をたとえ、あの子への恋しさ、いとしさを片時も忘れず、その思い出を形見にしよう、と表現している。哀惜の思いを直接的に表現している点で対照的である。

〔解説〕

二首の和歌に配された比喩表現を丁寧に読み取らせながら、どのような形で亡き児に対する悲しみを表現しているか、理解させたい。最終的には、両歌が片や逆説的、片や直接的と、対照的な形で、亡き児への思いを表現していることに注意を向けたい。

帰京

◉大意

夜に帰京した一行は、自邸の荒廃ぶりに驚く。預かってくれていた隣人に失望するが、お礼はしようと思う。

庭には、新しい小松が生えていた。この家で生まれ、土佐で亡くなった娘を思い出して、悲しみに耐えきれず歌を詠む。「（歌二首）この家で生まれたわが子は帰らないのに、新たな小松を見るのは辛い。亡くなった子に松のような千年の長寿があったならば、遠い土佐の地で悲しい別れをせずにいられたのに。」

心残りなことは多いが、とても書き尽くせない。ともかく、この「日記」は破り捨ててしまおう。

◉全体の構成

段落	ページ・行	大意
第一段	初め～278・6「志はせむとす。」	**荒廃したわが家** 入京してわが家を見ると、聞いていた以上の荒廃ぶりである。預けていた人の心も荒れていたのか、進んで管理を引き受けてくれた隣人なので付け届けを欠かさなかったのに……。今夜、家の者に大声で不満を述べさせることはせず、お礼はきちんとしようと思う。
第二段	278・7「さて、」～279・10「別れせましや」	**亡き娘を思う** さて、以前生えていた松は半分ほど枯れていたが、近くに新しく生えた小松が交じっていた。この家で生まれたが、土佐で亡くなったため、いっしょに帰ることができなかった娘を思い出し、悲しみにくれる。船人の子どもたちが騒いでいる。悲しみに耐えきれず、気持ちの通じ合える人と歌を詠み交わした。「（歌二首）この家で生まれたわが子は帰らないのに、新たな小松を見るのは辛い。亡くなった子に松のような千年の長寿があったならば、遠い地で悲しい別れをせずにいられたのに。」
第三段	279・11「忘れがたく、」～終わり	**日記の終わり** 忘れがたく、心残りなことも多いが、とても書き尽くすことはできない。ともかく、早くこの「日記」を破り捨ててしまおう。（日記の跋文。「男もすなる……ものに書きつく。」の序文に照応する。）

◉品詞分解

❶京	に	入りたち	て	うれし。	❷家	に	至り	て、	門	に	入る
	格助(場所)	動(タ四・連用)	接助(単接)	形(シク・終止)		格助(場所)	動(ラ四・連用)	接助(単接)		格助(場所)	動(ラ四・連体)

に、	月	明かけれ	ば、	いと	よく	ありさま	見ゆ。	❸聞き	し
接助(順接・偶然)		形(ク・已然)	接助(順接・確定)	副	形(ク・連用)		動(ヤ下二・終止)	動(カ四・連用)	助動(過去・連体)

より	も	まし	て、	言ふかひなく	ぞ	こぼれ	破れ	たる。
格助(比較)	係助(強意)	動(サ四・連用)	接助(単接)	形(ク・連用)	係助(強意・係)	動(ラ下二・連用)	動(ラ下二・連用)	助動(存続・連体・結)

❹家	に	預け	たり	つる	人	の	心	も、	荒れ	たる
	格助(場所)	動(カ下二・連用)	助動(存続・連用)	助動(完了・連体)		格助(体修)		係助(添加)	動(ラ下二・連用)	助動(完了・連体)

なり	けり。
助動(断定・連用)	助動(過去・終止)

◎口語訳

❶京に入り込むことができてうれしい。❷家に着いて、門を入ると、月の光が明るいので、とてもよく家の様子が見える。❸(土佐で)聞いていた以上に、言いようもないくらいひどく壊れてぼろぼろになっている。❹(家だけでなく)家に預けておいた人の心までも、すさんでいたのであったよ。

❺中垣（なかがき）　こそ　あれ、　一つ家（ひとつや）　の　やうなれ　ば、　望（のぞ）み　て　預（あづ）かれ
係助（強意・係）　動（ラ変・已然・結）　格助（体修）　助動（比況・已然）　接助（順接・確定）　動（マ四・連用）　接助（単接）　動（ラ四・已然）

る　なり。　❻さるは、便（たよ）りごと　に　物（もの）　も　絶（た）え　ず　得（え）
助動（完了・連体）　助動（断定・終止）　接続　格助（時間）　係助（強意）　動（ヤ下二・未然）　助動（打消・連用）　動（ア下二・未然）

させ　たり。　❼今宵（こよひ）、「かかる　こと。」　と、　声高（こわだか）に　もの　も　言（い）は
助動（使役・連用）　助動（完了・終止）　連体　格助（引用）　形動（ナリ・連用）　係助（強意）　動（ハ四・未然）

せ　ず。　❽いと　は　辛（つら）く　見（み）ゆれ　ど、　志（こころざし）　は　せ
助動（使役・未然）　助動（打消・終止）　副　係助（強意）　形（ク・連用）　動（ヤ下二・已然）　接助（逆接・確定）　係助（強意）　動（サ変・未然）

む　と　す。
助動（意志・終止）　格助（引用）　動詞（サ変・終止）

❾さて、　池（いけ）めい　て　くぼまり、水（みづ）　つけ　る　所（ところ）　あり。　❿ほとり　に
接続　動（カ四・連用・音便）　接助（単接）　動（ラ四・連用）　動（カ四・已然）　助動（存続・連体）　動（ラ変・終止）　格助（場所）

松（まつ）　も　あり　き。　⓫五年（いつとせ）　六年（むとせ）　の　うち　に、　千年（ちとせ）　や　過（す）ぎ
係助（添加）　動（ラ変・連用）　助動（過去・終止）　格助（体修）　格助（時間）　係助（疑問・係）　動（ガ上二・連用）

に　けむ、　片方（かたへ）　は　なくなり　に　けり。
助動（完了・連用）　助動（過去の原因推量・連体・結）　係助（区別）　動（ラ四・連用）　助動（完了・連用）　助動（過去・終止）

⓬いま　生（お）ひ　たる　ぞ　交（ま）じれ　る。　⓭おほかた　の、　みな
副　動（ハ上二・連用）　助動（完了・連体）　係助（強意・係）　動（ラ四・已然）　助動（存続・連体・結）　格助（主格）　副

荒れ　に　たれ　ば、「あはれ。」　と　ぞ、　人々　言ふ。
動（ラ下二・連用）　助動（完了・連用）　助動（完了・已然）　接助（順接・確定）　感動　格助（引用）　係助（強意・係）　動（ハ四・連体・結）

⓮思ひ出で　ぬ　こと　なく、　思ひ　恋しき　が　うち　に、　こ　の
動（ダ下二・未然）　助動（打消・連体）　形（ク・連用）　動（ハ四・連用）　形（シク・連体）　格助（体修）　格助（対象）　代名　格助（体修）

家　にて　生まれ　し　女子　の、　もろともに　帰ら　ね　ば、
格助（場所）　動（ラ下二・連用）　助動（過去・連体）　格助（主格）　副　動（ラ四・未然）　助動（打消・已然）　接助（順接・確定）

いかが　は　悲しき。
副　係助（強意）　形（シク・連体）

◎口語訳

❺（隣家との間に）隔ての垣根はあるのだが、一つの屋敷のようであるから、（先方から）望んで預かったのである。❻それでも、都へのついでのあるたびに（隣家へは）物品を絶えず送り届けていたのだ。❼（しかし、到着したばかりなので）今夜は、「こんな（に荒れてひどい）こと。」と、（従者たちに）大声で不満も言わせない。❽とても薄情だと感じられるけれど、（今まで家を預かってくれたことへの）謝礼だけはあげようと思う。

❾さて、（庭には）池のようにくぼんで、水がたまっている所がある。❿そのほとりに松もあった。⓫五、六年のうちに、（松の寿命である）千年もたってしまったのであろうか、半分はなくなっていた。⓬（反対に）新しく生えたものも交じっていた。⓭あたり一面が、すっかり荒れてしまっていたので、「まあ、ひどい。」と、人々は言う。⓮思い出さないこととてなく、恋しい思いでいっぱいである中にも、この家で生まれた女の子が、（土佐で亡くなり）いっしょに帰ることがないので、（そのことが）どんなに悲しいことか。

⑮船人（ふなびと）　も　みな、子（こ）　たかり　て　ののしる。⑯かかる　うち　に、　なほ　悲（かな）しき　に

係助（強意）　副　動（ラ四・連用）　接助（単接）　動（ラ四・終止）　連体　格助（時間）　副　形（シク・連体）　格助（対象）

堪（た）へ　ず　して、　ひそかに　心（こころ）　知（し）れ　る　人（ひと）　と　言（い）へ

動（ハ下二・未然）　助動（打消・連用）　接助（単接）　形動（ナリ・連用）　動（ラ四・已然）　助動（存続・連体）　格助（相手）　動（ハ四・已然）

り　ける　歌（うた）、

助動（完了・連用）　助動（過去・連体）

⑰生（む）まれ　し　も　帰（かへ）ら　ぬ　ものを　わ　が　宿（やど）　に

動（ラ下二・連用）　助動（過去・連体）　係助（強意）　動（ラ四・未然）　助動（打消・連体）　接助（逆接・確定）　代名　格助（体修）　格助（場所）

小松（こまつ）　の　ある　を　見（み）る　が　悲（かな）しさ

格助（主格）　動（ラ変・連体）　格助（対象）　動（マ上一・連体）　格助（体修）

と　ぞ　言（い）へ　る。⑱なほ　飽（あ）か　ず　や　あら

格助（引用）　係助（強意・係）　動（ハ四・已然）　助動（完了・連体・結）　副　動（カ四・未然）　助動（打消・連用）　係助（疑問・係）　動（ラ変・未然）

む、　また、かく　なむ。

助動（推量・連体・結）　副　副　係助（強意・係・結略）

⑲見（み）　し　人（ひと）　の　松（まつ）　の　千年（ちとせ）　に　見（み）　ましか

動（マ上一・連用）　助動（過去・連体）　格助（主格）　格助（比喩）　格助（知覚）　動（マ上一・未然）　助動（反実仮想・未然）

ば　遠（とほ）く　悲（かな）しき　別（わか）れ　せ　まし　や

接助（順接・仮定）　形（ク・連用）　形（シク・連体）　動詞（サ変・未然）　助動（反実仮想・終止）　係助（反語）

⑳忘れがたく、口惜しき　こと　多かれ　ど、　え　尽くさ　ず。
形（ク・連用）　形（シク・連体）　形（ク・已然）　接助（逆接・確定）　副　動（サ四・未然）　助動（打消・終止）

㉑とまれかうまれ、疾く　破り　て　む。
連語　形（ク・連用）　動（ラ四・連用）　助動（強意・未然）　助動（意志・終止）

◎口語訳

⑮船で同行した人たちもみな、子どもたちが寄り集まって大騒ぎしている。⑯こうしている間に、やはり悲しさに耐えきれなくて、ひそかに心が通い合う人と詠み交わした歌、

⑰（この家で）生まれた子は帰らないのに、わが家には（新たな）小松が生えている、それを見るのは（亡き子を想起させて）なんとも悲しいものだ。

と詠んだ。⑱やはりそれでもまだ言い足りないのであろうか、また、次のように（詠んだ）。

⑲亡くなったあの子を、松のように千年も生きるものとして、いつまでも見ることができたならば、遠い土佐の国で悲しい永遠の別れをしただろうか（いや、死に別れることなどなかっただろうに）。

⑳忘れがたく、心残りなことが多いけれど、とても書き尽くすことができない。

㉑ともかく、（こんなものは）早く破り捨ててしまおう。

◉展開図

二月十六日　帰京＝（京の家に到着）

←
明るい月光の下
自宅の荒廃ぶり＝〈言ふかひなくぞこぼれ破れたる。〉
←→　管理を依頼した隣人への非難〈家に預けたりつる人の心も、荒れたるなりけり。〉
分別ある心で礼を尽くそう〈いとは辛く見ゆれど、志はせむとす。〉

新しく生えた小松＝〈いま生ひたるぞ交じれる。〉

←
（土佐で亡くした女の子）→悲嘆〈この家にて生まれし女子の、もろともに帰らねば、いかがは悲しき。〉
歌二首＝「心知れる人」（妻）と詠み交わす→「松」を歌題とする哀傷歌
・新たな小松を見るのは辛い→〈小松のあるを見るが悲しさ〉　小＝子
・「松の千年」の寿命があったら→〈松の千年に見ましかば〉

←
〈忘れがたく、口惜しきこと多かれど、え尽くさず。〉

←
跋文〈とまれかうまれ、疾く破りてむ。〉→日記の「結び」→　冒頭の女性仮託と呼応
・謙譲
・偽装

語句・文脈の解説と脚問・発問

278ページ

L1　京に入りたちて　九三五（承平五）年二月十六日のこと。京の街中に入り込んで。「入り立つ」は、入り込む、中へ立ち入る、の意。続く「うれし」は、やっとのことで故郷へ帰り着いた嬉しさを示している。

L1　家に至りて　家に着いて。貫之の自邸について、『無名抄』（鴨長明著、一二一一年頃成立の歌論書）、『拾芥抄』（鎌倉時代成立の有職故実の事典）は、どちらも現在の京都御所の東南にあたる仙洞御所近辺であったという伝承を記している。現在仙洞御所内に貫之邸を示す碑が建っている。

L1　月明かければ　月の光が明るいので。ここでの月は、陰暦十六日の夜の月。まだ満月から一日分欠けたに過ぎず、皓々とした光を放つ月が深夜中天にあり、一行を照らしていた。なお、十六夜の月は日没後ためらうかのように昇ってくることから「いざよひ」（「いざよふ」は「ためらう」の意）の月といわれていた。この日の月の出は午後七時二十分頃と算定されている（『土佐日記全注釈』）。

L2　聞きしよりもまして　話に聞いていた以上に。土佐の国にいる時から、家が荒れていることを、手紙や言づてに聞いていたらしい。

L2　言ふかひなく　言ってもしかたがないほど、話にならないほど。

L2　こぼれ　「こぼる」は、壊れる、破損する。「こぼつ（毀つ）」の自動詞形でラ行下二段で活用する。「こほる」とも。下の「破る」も下二段活用動詞で、壊れる、砕ける、だめになる、の意。「こぼれ破る」で、（家のあちこちが）崩れてぼろぼろになっている様子を表す。

L3　家に預けたりつる人の心　家の世話を頼んでおいた人の心。「家に預けたりつる」という言い方は独特で、解釈も古くから分かれるところであった。諸説を整理した上で、萩谷朴『土佐日記全注釈』は、この「に」を「累増・添加」の用法とみて、「荒れたのは家だけでなく、その上に人の心も」とする説を提起した。しかし、「に」の累増の用例に決め手を欠くためであろうか、賛同の少ない解釈となっている。最近の諸注釈は、この「に」を、場所を表す格助詞と解して、「主客を置き換えてわざと家を主に、人を従に見立てて諧謔に言ったもの、とする説（鈴木知太郎「日本古

脚問・発問

278ページ

問　**「いとよくありさま見ゆ」（1行）とあるが、「見ゆ」と「見る」との違いを説明せよ。**

答　「見ゆ」は、自然と見えるという自発の意を含む動詞。「見る」は、意識して視野に入れること。ここでは、「（周りの様子を）とてもよく見ることができる」の意味で用いられている。

問　**「望みて預かれるなり」（4行）とあるが、預かった人とは誰か。**

答　前国司宅（紀貫之宅）の隣家の主人。

問　**「かかること」（5行）とは、どのようなことか。**

答　家が言いようもないほどひどく壊れていること。

（解説）　「かかる」は「かくある」のつまった形。「こと」は詠嘆を表す形式名詞。前文の「言ふかひなくぞこぼれ破れたる」（278・2）を受けて不満を述べた部分。なお、「貫之が今夜は隣家の人に、これこれしかじかの次第でなどと、管理の行き届かなかった弁明を、甲高く言わせるようなことはしなかった」（新潮日本古典集成）とする異説を

典文学大系」など）」を採るものがほとんどである。つまり、普通ならば「人に預けたりつる家」というべきところを逆に「家に預けたりつる人の心」ということで、隣人の無責任さに対する不満を皮肉っぽく表現したと解釈するのである。確かに、この解釈のほうが『土佐日記』全体に存する風刺的な姿勢や諧謔的な姿勢から考えて説得力をもつだろう。家を預けたつもりであったが、実際は逆で、家に預けた人の心も（家と同様に）すさんでいたというのである。菊地靖彦氏は「新編日本古典文学全集」で、さらに「人の心も月の光に明らかになったという趣向」と注し、出立時の十二月二十三日に「人の心」が問題となっていたことから、そこに対照的な構成があることを指摘している。

L3　中垣こそあれ　隔ての垣根はあるのだが。「中垣」は、家と家との間を隔てる垣根。「こそ……已然形」で文が終止せずにあとへ続く場合、逆接の文脈となる。「板書例」参照。

《板書例》

「こそ……已然形」＝後文へ続く場合 → 〈逆説〉の文脈

L4　さるは　それでも、の意を表す逆接の接続詞。「さあるは」の短縮形。先方の希望で家を預かってもらうことになったのであるが、そうとはいえ、（こちらはその好意に甘えていただけでなく、）の意。

L4　便りごとに　都へのついでのあるたびに。具体的には、土佐から都へ往復する使者を出すたびに、土佐の名産などを持たせて、隣家の人に贈る気遣いをしていたということであろう。

L4　物も絶えず得させたり　物品を絶えず送り届けていたのだ。「させ」は、使役の助動詞「さす」の連用形。

L5　声高にものも言はせず　大声でものを言わせない。主人として、家の者や供の者たちに、隣家に対して聞こえよがしに大声で不満を訴えることをさせない、というのである。一説に「隣家の人に、これこれしかじかの次第でなどと、管理の行き届かなかった弁明を、甲高く言わせるようなことはしなかった」（木村正中『土佐日記　貫之集』〈新潮日本古典集成〉）。

L5　いとは辛く見ゆれど　とても薄情だと感じられるけれど。「は」は強意を表す係助詞。「辛し」は、相手に対して、ひどい、薄情だと思う気持ち。隣家の人々が管理を怠っていたことに対して、薄情だと不平を述べていた。

紹介し、古文の解釈が多様であり得ることに生徒の注意を向けてもよいかもしれない。

問　**「いとは辛く見ゆれど」（5行）とあるが、何が「辛く」見えるというのか。**

答　隣家の人々が、頼んでおいた家の管理を怠っていたこと。

脚問　**「志」（6行）とは何か。**

答　謝礼のこと。金品を贈り謝意を表すこと。

279ページ

問　**「千年や過ぎにけむ」（2行）と言ったのはなぜか。**

答　「千年」の寿命を保つとされた松がわずか五、六年の留守のうちに半分なくなってしまったから。

（解説）　荒れた庭を嘆きながら、隣人への皮肉を込めて記している。

問　**「おほかたの」（3行）の「の」を文法的に説明せよ。**

答　格助詞「の」の主格としての用法である。

（解説）　格助詞「の」の主な用法は、主格、連体修飾、同格である。

問　**「心知れる」「言へりける」（6行）の「る」「り」は同じ助動詞である。その意味・用法を説明せよ。**

答　完了・存続の意味を表す「り」で、四段

る（↓発問）。

L6 志はせむとす 謝礼だけはあげようと思う。「志」は、謝意、お礼の気持ちを指すが、実際は「謝礼」すなわち金品を送ること（↓脚問）。現在でも、「寸志」「志」という名で用いる。「せむとす」の「せ」と「す」は、サ変動詞「む」は意志の助動詞「む」の終止形で、……しようとする、の意。律儀に礼を尽くそうとしているところに、隣家の人と一線を画している姿が浮かび上がる。

279ページ

L1 池めいてくぼまり 池のようにくぼんで、水のたまっている所がある。「めく」は、それらしい様子が表れることをいう四段型の活用をする接尾語。「今めく」「色めく」など。「くぼまる」は、一部が低くなっているさま。これは、自邸の池が池というまでもないほど小さいものであることを強調することで、自らの住まいの卑小さを謙遜しているのであろう。ちなみにこの時代の貴族の邸宅には寝殿（寝殿造りの中心の建物）の南側に池があることが普通だった。かつて池であった場所が、荒廃して原形をとどめていない様子を示しているとする説もある。

L1 水つける 水がたまっている。四段動詞「漬く」の已然形に存続の助動詞「り」が付いた形。

L1 五年六年のうちに 「五年六年」は、前国司（紀貫之）の帰京が承平五（九三五）年にずれ込んで、足かけ六年となったことを反映した表現だろう。日記冒頭の「四年五年」と対応した表現にもなっていることに注意したい。

L2 千年や過ぎにけむ、片方はなくなりにけり （松の寿命である）千年もたってしまったのであろうか、半分ほどなくなってしまっていた。松が千年の寿命を保つ、長寿の木と考えられていたことをふまえた表現。五、六年と思っていたが、実は千年が過ぎたのか、と変貌した松の姿を嘆き、隣人への皮肉をもらしている（↓発問）。

L3 おほかたの 「おほかた」は、全般。大体。「の」は、主格を表す格助詞（↓発問）。ここは、松だけでなく辺り一帯が、の意。

L3 「あはれ。」とぞ、人々言ふ 「まあ、ひどい。」と、人々は言う。「あはれ」は感動詞。主として、心からの感動や情感を表すときに用いられる。この場合は、一帯があまりにひどく荒れ果てた状態を前に、ため息のような言葉しか出ない。

L4 思ひ恋しきがうちに 恋しい思いで活用動詞の已然形とサ行変格活用動詞の未然形に接続する。

問 **「生まれしも……」（8行）の歌に用いられている技巧を説明せよ。**

答 「小松」の「小」に「子」を重ねている。

（解説） 子が死んで帰らなかった悲しみを目の前の光景を通して歌いあげている。

脚問 **「見し人」（10行）とは、誰のことか。**

答 前国司（紀貫之）の娘（任国で死別した女児）。

問 **「とまれかうまれ、疾く破りてむ。」（12行）とは、誰が何をどうしようというのか。**

答 作者が、今まで書いてきた日記を、すぐに破り捨ててしまおうとしている。

いっぱいである中にも。

L5 もろともに いっしょに。そろって。

L5 いかがは悲しき どんなに悲しいことか。「いかが」は、本来「いかにか」で、疑問・反語を表す係助詞「か」を含んでいる。「は」は強意を表す係助詞。よって、「悲しき」と連体形で結んでいる。「いかがは」には、反語・疑問・強調の用法があり、ここは下の「悲しき」を強調する用法。

L5 船人 船に乗って帰ってきた一行。前国司の一族郎党を指す。楫取りや水夫など乗

組員は含まない。

L5　子たかりてののしる　子どもたちが集まって大騒ぎしている。「たかる」は、集まる、の意の動詞。現代語でも、「蠅がたかる」「人だかり」などと用いる。「ののしる」は大声で騒ぐこと、の意。「門出」第二段にも「ののしるうちに、夜更けぬ。」（274・7）とあった。冒頭部と呼応する表現。冒頭部分と末尾との表現上の対応関係は、『土佐日記』が強い構成意識のもとで書かれたことを示しているのであろう。

L6　なほ悲しきに堪へずして　「なほ」は、そうはいってもやはり、の意。同船していた人の子どもたちが、家に着いた喜びに大騒ぎしている光景を見るにつけ、作者は「この家にて生まれし女子」（279・4）が土佐で亡くなってしまい同道できなかったことに思いをはせる。

L6　ひそかに心知れる人と言へりける歌　亡き娘を偲んで「ひそかに」歌を詠み交わす人物は、父と母である前国司と妻がふさわしい。この部分の書き手は紀貫之その人と同一といってよく、したがって「ひそかに心知れる人」は紀貫之の妻が想定されることとなる。理詰めで考えれば、冒頭に記されていた女性仮託そのものが破綻していることとなる。女性仮託叙述の限界ともいえようが、そもそもこの日記冒頭の女性仮託は仮名で書き始めるための方便でもあり、作者が女性視点を作品内で一貫しようという志向をもっていたとは考えにくい。女性の筆を装いながら、それが読者から偽装であることがすぐに見破られることは紀貫之の意図の範囲内であったろう。むしろ一つに限定できない視点が混在していることは、この作品の創作性を支えている。描かれた人々も、作者によって操作された存在であったことが想像される。時に紀貫之の分身であったのではないだろうか。

L6　心知れる人　ここは、作者の妻を指すか。「心知れる人」とは、お互いに心を察し合っている人のこと。作者の妻を暗示していると捉えてよいだろう。本当に詠みあったわけではなく、ここでの妻を作者の分身と考えてみることもできるかもしれない。

L8　生まれしも帰らぬものを　（この家で）生まれた子は帰らないのに。「ものを」は逆接の確定条件を表す接続助詞で連体形に接続する。形式名詞「もの」と間投助詞「を」との複合語。「……なのになあ」という詠嘆・感動を含み、和歌によく用いられる表現。

L8　わが宿に小松のあるを見るが悲しさ　わが家に（新たな）小松が生えているのを見るのは（亡き子を想起させて）なんとも悲しいものだ。「小松」の「小」に「子」を響かせている（↓発問）。新たに生えた小松が今は亡き子を連想させ、悲しみを呼び覚ましている。なお、この歌の類歌として、紀貫之が帰京後、亡き藤原兼輔邸を訪問して詠んだ次の歌が指摘されている。「ひき植ゑし二葉の松はありながら君が千歳のなきぞ悲しき」（『後撰和歌集』哀傷・一四一一）。この歌の詞書は「兼輔朝臣なくなりてのち、土佐国よりまかりのぼりて、かの粟田の家にて」とある。兼輔は紀貫之と親しくしていたパトロンであり（ちなみに紫式部の曽祖父である）、その死は貫之にとって痛切な悲しみをもたらしたと思われる。この「後撰集」の和歌と小松の和歌の場面が時間的に近接し、兼輔追慕の情と亡児を偲ぶ情とが重なることから、亡児哀傷そのものがフィクションであるとする説もある。

L9　なほ飽かずやあらむ　やはり、それでもまだ言い足りないのであろうか。「飽く」は、満ち足りる、十分になる、の意。「や」は疑問を表す係助詞で、結びは推量の助動詞「む」の連体形。なお、この語から、次の「見し人の……」の歌を「心知れる人」の歌ととる説もある。

L10　見し人　かつて（この家で）見た人。ここは、土佐で亡くなった女児を指す（→脚問）。

L10　遠く悲しき別れせましや　遠い土佐の国で悲しい永遠の別れをしただろうか、いや、しなかっただろうに。「遠く悲しき別れ」は、遠い土佐の国での悲しい別れ、つまり死別のこと。今は亡きあの子に、松のように千年の寿命があったならば、との反実仮想の表現を受ける。「まし」は、上の「ましかば」と呼応して反実仮想を表す助動詞（「板書例」参照）。一説に『貫之集』の兼輔妻の死を悼む歌「恋ふるまに年の暮れなば亡き人の別れやいとど遠くなりなん」（七五四）などとの関連を読み取り、ここにも兼輔思慕の残影を読み取ることができるとする。

《板書例》

《反実仮想の表現》
［事実に反することを仮に想定する］
「Aせば」
「Aましかば」 ⇒「Bまし」
＝
もしもAだったなら、Bだったのに。

L11　え尽くさず　とても全てを書き尽くすことはできない。「え……ず（打消）」は、不可能を表す用法として重要。

L12　とまれかうまれ　ともかく。「ともあれかくもあれ」がつまった形。「もあ（mo-a）」が母音「o」欠落により「ま（ma）」に音韻変化、「かう」は「かく」のウ音便化した形。何はともあれ。

L12　疾く破りてむ　（この日記は）早く破り捨ててしまおう。「疾く」は、形容詞ク活用の「疾し」の連用形。形容詞の連用形の副詞的用法で、早く、すぐに、の意である。「破る」は引き破る、の意。「てむ」は、強意の助動詞「つ」の未然形＋意志の助動詞「む」の終止形。ここは、謙遜の気持ちをこめて、この程度の書き物は人目に触れぬうちに処分してしまおうという、日記全体の跋文となっている（→発問）。対読者意識が明示されている部分であり、この作品が読み手を想定して書かれたものであることがわかる。序文あるいは跋文で、書き手が自らの著作を取るに足らないものと謙遜するのは（本当はこれほどすばらしい著作は他にはないと自負していたとしても）、古文では一般的な作法であった。

　併せて、この作品が現存していることからも明確なように、この処分の宣言は虚構であり、偽装ともなっている。冒頭の女性仮託が偽装表現であったことと同様に、末尾もまた偽装なのであり、この首尾の呼応は、この作品が「きわめて構造化された作品である」（新日本古典文学大系）ことを示しているのである。

＊語句

明かし　［形ク］①光が明るい。②心が清い。
こぼる　［自ラ下二］壊れる。破れる。
もろともに　［副］いっしょに。そろって。
疾し　［形ク］①勢いが激しい。速度が速い。②（時期的・時間的に）早い。

・図版解説・

●「紀貫之像」（教科書280ページ）

　鎌倉時代から江戸時代にかけて優れた歌人の肖像を描く歌仙絵が多く作られた。『上畳本三十六歌仙絵』は、最も古い歌仙絵で、十三世紀に制作されたと考えられる。貴人の座所にも用いられる上畳に座った姿で描かれているため、「上畳本」と名付けられた。もとは巻物であったが分断されて伝わる。五島美術館蔵（名鏡勝朗撮影・五島美術館提供）。

コラム

亡児哀傷はフィクションか

『土佐日記』が極めて創作性の強い日記文学であることはいうまでもない。この仮名日記は紀行文にとどまらない、さまざまなテーマが抽出できるが、その中でも亡児哀傷は作品が最後に強調して閉じられているように、極めて重要なテーマとなっている。

ところで、この亡児哀傷について、フィクションであるとする説が提起されている。つまり、紀貫之には土佐で亡くなった娘はいなかったというのだ。

その説にはさまざまな理由が示されているが、特に紀貫之が土佐に赴任していた間にパトロンであった醍醐天皇（延長八年）、宇多天皇（承平元年）、藤原定方（承平二年）、藤原兼輔（承平三年）が次々と亡くなった事実をふまえ、その喪失感が亡くなった女児の記述に転化し、表象しているという指摘は興味深い。この作品が強い創作性をもって記されていることや、文末の歌が亡き兼輔を追慕した『後撰集』歌と共通性が高いことも、その説を説得力があるものとしている。ただ、たとえ虚構色が強い日記であっても、果たして自分の子の死を仮構するのか、といった反論もある。

作品は「とまれかうまれ、疾く破りてむ」という言葉でもって、閉じられるほかなかった。

◉鑑賞

ようやく戻ってきた都、懐かしい自宅であったが、その荒れ方に「人の心」の荒廃も見る。都もまた安寧の場所ではなかったかのようだ。あまりに辛い、隣家の主人の仕打ちであったが、浮き世の義理は果たすべく、お礼はしようという。都に戻っても、人の世の生きにくさは変わらないし、そうした中で折り合いをつけて生きていくほかないといっているかのようだ。荒れた自邸に生えていた小松を見るにつけ、思うのは、京で生まれ、土佐で亡くなった娘のことである。どこに行っても、この悲しみから逃れることができないことを示すかのように、「心知れる人と」詠みあった哀傷歌二首を記して、この日記は擱筆される。さまざまな「人の心」、人の思いを記してきた日記であるが、最後に記されたのは、やはり亡き娘への哀惜の思いであり、そこにはせっかく戻ってきた都とは思えないほどの荒涼とした心象風景が広がっている。あまりに自分の感情を吐露しすぎたことに困惑するかのように、

学習の手引き

一❖次の傍線部を文法的に説明し、口語訳してみよう。

①見し人の松の千年に見ましかば遠く悲しき別れせましや（279・10）

②忘れがたく、口惜しきこと多かれど、え尽くさず。（279・11）

【解答例】

①見ましかば…マ行上一段活用動詞「見る」の未然形「見」／反実仮想の助動詞「まし」の未然形「ましか」／順接の仮定条件を表す接続助詞「ば」。「ましかば……まし」の形で、「もしも……だったならば……だったのに」という意味を表す。

別れせましや…名詞「別れ」／サ行変格活用動詞「す」の未然形「せ」／反実仮想の助動詞「まし」の終止形「まし」／反語を表す係助詞「や」。

〔口語訳〕

亡くなったあの子を、松のように千年も生きるものとして、いつまでも見ることができたならば、遠い土佐の国で悲しい永遠の別れをしただろうか（いや、死に別れることなどなかっただろうに）。

②え尽くさず…副詞「え」／サ行四段活用動詞「尽くす」の未然形「尽くさ」／打消の助動詞「ず」。

〔口語訳〕

忘れがたく、心残りなことが多いけれど、とても書き尽くすことができない。

〔解説〕

①まず、「反実仮想」の用法をきちんと押さえたい。他に、「……せば……まし」の形で使われることも多いので要注意。

②「え……（打消）」で不可能を表す。副詞のうち、修飾される文節に一定の言い方を要求するものを「呼応の副詞」あるいは「陳述の副詞」という。

二❖「生まれしも……」（279・8）と「見し人の……」（279・10）の二つの歌にこめられた思いについて、話し合ってみよう。

【解答例】

「生まれしも……」の歌

・「小松」から「子」を連想して、亡き子どもを思い出している。

・小松の生長と比較して、もう戻ってくることのない子どもへの哀惜の念を深めている。

「見し人の……」の歌

・「松」の千年の樹齢にあやかって長生きをして、またこの家でいっしょに暮らしたかったのに、と幼くして亡くなった女児のはかない命を惜しんでいる。

・松のように千年の寿命があったなら、と現実にはあり得ない仮定をしてまでも、亡き子といっしょに帰りたかったのに、と悔やむ思いを深めている。

〔解説〕

「小松」の比喩、「千年」の意味、反実仮想の用法によって強調される内容についての検討から出発して、詠み手の「思い」へと発展させていくよう意識したい。

三※京の家に戻ってきた作者が感じた変化とはどのようなものであったか、まとめてみよう。

【解答例】

1　土佐に赴任していた間に、隣家のずさんな管理によって、自宅がすっかり荒廃してしまったこと。

2　京から土佐に赴任する時に同道した娘が土佐で亡くなったため、いっしょに帰ってこられなかったこと。

〔解説〕

それぞれ、次の本文に該当する。

1→「言ふかひなくぞこぼれ破れたる」（278・2）、「五年六年のうちに、千年や過ぎにけむ、片方はなくなりにけり。いま生ひたるぞ交じれる。」（279・1）、「おほかたの、みな荒れにたれば」（279・3）

2→「この家にて生まれし女子の、もろともに帰らねば、いかがは悲しき」（279・4）

1では、すっかり荒廃した自宅の様子を繰り返し皮肉まじりに記している。

2では、ようやく戻ってきた自宅を目のあたりにして、この家で育った娘を喪（うしな）った悲しみをかみしめている。

研究・発展

◉参考資料1

『土佐日記』の亡児哀傷記事をいかに位置づけるかは重要な問題である。これを「卓越した虚構というレトリック」（新日本古典文学大系）とする長谷川政春氏の論を以下に掲げた。本来ならば、名著である『紀貫之論』や新日本古典文学大系の解説を挙げるべきだろうが、引用のスペースの問題もあり、より纏まった直截的な論述である『研究資料日本古典文学』から引用した。前半に極めて的確な文学史的評価が記されていることも、この書から引用した理由である。

〈意義・評価〉『土左日記』の意義の第一は、何と言っても文学史的意義であって、それは、「日記文学」を創造したことである。漢文体の男性日記や、平仮名の女性日記であっても『太后御記』のように実録性に価値をおくのではなく、主題のためにはあえて虚構をも用いるということである。「男もすなる日記といふものを、女もしてみむとて、するなり」という冒頭文には、明らかに文学の方法としての「虚構」が意識的に用いられている。いわゆる平安時代の文学の一特色である、『蜻蛉日記』や『更級日記』を代表とする女性日記文学の後続を、日本の文学史の上に可能にしたわけである。その二は、仮名散文の使用によって人間の内面や真実を具体的に描いてみせたことである。任国の人々や新国司をはじめ、船頭、乗船の客、途中で出会った人たち、そして隣人と、時には滑稽さとして、また諷刺として人の心の在りようを描写した。三つ目は、作者の貫之が女性の筆に仮託したことによって自己を観照する立場を取って、いわゆる自照文学の先駆となったことである。後続の『蜻蛉日記』は、「かくありし時過ぎて、世の中にいとものはかなく、とにもかくにもつかで、世に経る人ありけり」の文で書き出されて、自身を「人」と物語の筆法にならって三人称にし、「身の上」を書き上げたのであり、『更級日記』もまた、「あづまぢの道の果てよりも、なほ奥つ方に生ひいでたる人」と自身を三人称化して自己と自己の生涯を回顧するのである。その他には、『土左日記』は紀行文学の道を拓いた点である。ただし、自然よりも人間、風景よりも人の心に興味があり、また表現のおもしろさに力点が置かれていて、ついぞほんとうの「風景」は発見されていない。

なお、ここで、いささか私見を述べてみる。それは、京で生まれて土佐で死んだ幼女の事件は虚構ではないか、ということである。貫之にとって土佐の地は実質的に初めて下向する鄙（ひな）であり、同族の紀夏井の流謫の地であり、宇多・醍醐両天皇をはじめ、藤原兼輔や藤原定方などの死を聞くことになった地であった。同時に彼自身六〇歳を過ぎていた。だから、「幼女の死」は彼が土佐の地で邂逅し予感した「死」の象徴的な虚構化ではなかったか。老男→幼女の換置は、『土左日記』の特質である対認識の表れとみることができる。土佐の地できっと流人意識を抱かざるを得なかったであろう都びと貫之の心の支えとなったのは、醍醐天皇の勅命による『新撰和歌集』の単独撰進の事業であったろう。その勅旨を伝えたのが兼輔であった。だから、貫之にとって兼輔は忘れ難い人であった。二月四日の条の、「親幼くなりぬべし」や「死し子顔よかりき」という親の子を思う情は、萩谷朴が『土佐日記全注釈』（角川書店、昭42）で指摘した通り、兼輔の「人の親の心は闇にあらねども子を思ふ道にまどひぬるかな」（後撰集・一一〇三）の歌を念頭に置いていたと言えよう。すなわち、私は、『新撰和歌集』にも採録した右の兼輔の歌を、貫之が『土左日記』の主要なモチーフである「幼女の死」へと変奏させた面も重なっているのではないか、と考えて

いる。

長谷川政春「土左日記〈意義・評価〉」（『研究資料日本古典文学⑨日記・紀行文学』一九八四年・明治書院）

◉参考資料2

『土佐日記』の終末部の荒涼とした風景をこれほど掬い取った読解は他にないだろう。さまざまに考えさせられることは間違いない。本書は紀貫之ルネサンスというべき評伝であり、この歌人を知るためにも通読をお勧めしたい。

ところで、『土佐日記』は、長い船旅を終えて都の住まいにようようたどり着いたところで閉じられる。日記最後の二月一六日の条をどう読むのかに『土佐日記』論のすべてがかかっている。

（本文・口語訳略）

月光に照らしだされた荒涼たる旧居の景がここにある。それは「いふかひなくぞこぼれ破れたる」という惨状で、家の管理を怠った隣人の「心」も「荒れたるなりけり」となる。なかでも私は「池めいて窪まり、水つける所あり」という箇所に注目しないわけにいかない。満々たる海水はもはやここにはなく、わびしげな水溜まりがあるだけであり、自在にして放漫な想像力を喚起せしめた海の旅が終りを迎えたことを意味する。荒れ果てた旧居、涸れかかった水溜まりは、言葉の死、記号の死、そして想像力の死を意味し、これまでの一切が幻であったことをあらためて我々に突きつける。

この死に覆われた世界の中で、「生まれしも帰らぬものを我が宿に小松のあるを見るが悲しさ」というように、松の新芽に縋（すが）りつくように、亡児を偲ぶ歌がかろうじて詠まれたりするが、恋慕すればするほど、もはや子供はいないとする認めたくない事実だけが回帰してくる。子供の死とは、不在の対象を現前させる言葉の能力を発揮させるための状況設定であることは繰り返し述べてきたが、いわばこれは、『土佐日記』の言語世界がいかに多様であろうとも、一皮剝けば、指示対象のない「虚無」だということを証明した箇所であるといえる。

それにしても、想像力の源泉としての水が涸れ、言葉が死滅した世界とは何と不気味なことか。まさに三島由紀夫『豊饒の海』最終巻「天人五衰」末尾のように、月光のふりそそぐ、虚無的にして凄惨な、枯渇した風景……。そして最後は、「とまれかうまれ、とく破りてむ」として、日記作者もこの日記テクストも幻のごとくに消え失せんとしているのであった。言語の外には何もないとするこの絶対の虚無、最後の最後にとうとうこの深淵が顔をのぞかせてしまったのだ。

『土佐日記』の基底部に潜在する虚無。思えば、日記中に頻出する、次のような諧謔表現のもつ意味にもあらためて注意したい。「船路なれど、馬の餞す」（一二月二二日）、「上中下酔ひあきて、いとあやしく、潮海のほとりにてあざれあへり」（同）、「一文字をだに知らぬ者、しが足は十文字に踏みてぞ遊ぶ」（同二四日）、「ただ押鮎の口をのみぞ吸ふ。この吸ふ人々の口を、押鮎もし思ふやうあらむや」（元日）、「白馬を思へど甲斐なし。ただ、波の白きのみぞ見ゆる」（同七日）、「船子どもは、腹鼓をうちて、海をさへ驚かして、波立てつべし」（同）、「海は荒るれど、心はすこし凪ぎぬ」（同九日）、「黒鳥のもとに白き波を寄す（楫取りの発言）」（同二一日）、「海のまた恐ろしければ、頭もみな白けぬ」（同）等のように多出する表現をどうみるべきであろうか。

ブラック・ユーモアとでも評すべく、笑うに笑えぬ、妙にかわいた感触だけが残るではないか。あえていえば、可笑しくないところが可笑しい。これら言葉の戯れ、戯れのための戯れをみると、その背後になにかニヒルなるものを嗅ぎつけないわけにはいかない。燃えたぎる情念、熱狂、哄笑、肉体等というものとは無縁な笑いがここにある。

すべての言語表現の背後には「死じ子、顔よかりき」の不気味な表象が沈んでいる。

思えばこのような日記の終りは、当初より予想された旅の終焉だった。京の旧宅にたどりついた瞬間、こういう無惨な解答が出てしまうことは最初から分かってもいた。「都へと思ふをものの悲しきは帰らぬ人のあればなりけり」（一二月二七日）という船出の歌をもう一度確認されたい。子供を土佐で失ったがゆえに、帰京を素直に喜び得ないような、都に近づくほどに息苦しさが増してくるような旅であった。都に帰れることを歓迎するようでいて、子供の死という厳然たる事実を突きつけられることを潜在的に恐れており、だからこそ逆に遅延させることを願っているような旅であった。「なほ同じ所にあり。海荒らければ、船出ださず」（一月一八日）、「日あしければ、船出ださず」（同一九日）、「昨日のやうなれば、船出ださず」（同二〇日）等というように、船旅がままならぬことへの苛立ちを禁じ得ないようだが、実は停滞することを楽しんでさえいるのである。土佐から都への行程を、なんと五五日も要しており、当時といえども、はたしてこんなに日数を費やすことがあるのか。海の上でこそ、束の間現前し得た、言葉の世界を浮遊するこの幻想旅行、まさに船上にいるうちが花であり、滑らかに進行することを逆に惜しむかのような……。

都に近づけば近づくほどに水は確実に涸れていく。淀川上りでは、「河の水干（ひ）て、悩みわづらふ」（二月七日）、「河の水なければ、ゐざりにのみぞゐざる」（同九日）というように、川水が少なく、いざるような船の遅々たる歩み、しかも船君も病気がちであるという。当時の淀川の水量が少なかったなどという問題ではない。時に川底に映じた相応寺（さうおうじ）の柳や（二月一一日）、桂川の月影を詠んでおり（同一六日）、例の射影に興ずる余裕もなくはないが、結局のところ、想像力の源泉である「水」が、終点に近づくほどに涸れてきている。そして家にたどりついた瞬間、そこにはちょぼんとした水溜りだけが残る。

神田龍身『ミネルヴァ日本評伝選　紀貫之』（二〇〇九年・ミネルヴァ書房）

◉参考資料3

『土佐日記』の船旅がどのようなものであったか。文学的な記述からではわからない事実を歴史学の碩学が解き明かしている。必読の文献だろう。なお、近時、歴史学から『土佐日記』を論じた木村茂光編『歴史から読む『土佐日記』』（二〇一〇年・東京堂出版）も出版された。

土佐守の任期を終えた紀貫之は、承平四年（九三四）一二月二一日、後任に官舎を明け渡し大津（現高知市大津乙舟戸）に移った。二七日には大津を出帆、翌年二月一六日通算五五日を要して京のわが家へ帰り着く。

この間、土佐国内では浦戸（現高知市浦戸）・大湊（現南国市前浜）・奈半（なは）利（り）（現安芸郡奈半利町乙）・室津（現室戸市室津）と、船路の泊まりを重ねた。以後阿波の海岸沿いを北上、鳴門の土佐泊（現徳島県鳴門市鳴門町）から淡路島の南をかすめ、紀淡海峡（友ヶ島水道）に入り、泉州沖から淀川河口まで北上、淀川を遡上している。この長期にわたる船旅のことを女手の日記にしたのが、『土佐日記』である。貫之はその間の知人・交友との別離、各地の風光や船中のできごと、または各港でのエピソードなどを記す。

貫之が乗った船がどんな構造だったか、『土佐日記』からは明らかでない。しかし、室町期までの日本の大型船は、準構造船と呼ばれる形式だったことがわかっている(1)。準構造船とは、二つ以上の刳船（丸木船）部材を前後に継ぎあわせて造った船体の両舷に、一〜二段の舷

側板をつけて乾舷（喫水線から上甲板までの舷側）を大きくし、耐波性や積載量の増大をはかった船のことである。

丸木船だって！　と思われるかもしれない。たいするに、コロンブスやマゼランの乗った西洋の船は、竜骨・肋材（船の肋骨を組み立てる諸材）・横梁・縦通材（船体の前後の方向に通じ、縦強度を保つ部材）を組み合わせて骨格を造り、外側に比較的薄い板材を張って船体にした。本格的な構造船である。

わが国のように、丸木を削って船体を造るのであれば高い技術は要らない。しかも頑丈である。日本ではかの地に比べ木材資源が豊かで、巨材がたやすくえられた。大海原に乗り出す機会がないから、無理して構造船を造るより効率が良いのである。船上には客室になる屋形のほか、一本の帆柱があり莚製の帆がかかる。舷外には張り出しが設けられ、水手（土佐では「すいしゅ」と読んだ）と呼ばれる漕手が座ってオール（櫓）を漕ぐ。オールは六～一二挺。帆は追い風を利用するだけの初歩的な構造で、推進は主にオールによった。

『土佐日記』に櫓走の記事は多く、はっきり帆走とわかる場面は、一月一六日の阿波の海岸を航行している時だけである。実際にはもっと多く帆が使われたことだろうが。オールを漕ぐのはきつい。櫓走の時はエイヤ、エイヤのかけ声で漕いだらしいが、そのほか『土佐日記』中には、水夫たちの歌う唄が幾つか紹介されている。その一つを意訳する。「ゆんべの子どもはどこ行った、来たら銭もらうんだがな、嘘ついて掛け買いしてさ、銭持ってこない、顔出しもせずにさ」。

貫之は他にもたくさんあるが、書かないといっている。もっときわどい卑猥な唄が歌われていたのだろう。書き残してくれれば、海の荒くれ男たちの日ごろの屈託、肉声の一端が聞けたものを、と残念である。もっともそういっているそばから貫之は、船中では「海の神に怖ぢて」紅の濃い赤い着物は着ないという女性たちが、停泊中にまばらな葦の陰を頼りに、着物の裾をたくしあげ、陰部を露出しながら排泄している様子を描いている。

それにしても土佐から京に帰るのに五五日、浦戸から淀川河口までで三八日というのは、ちょっとかかりすぎの感あり。だが、貫之とほぼ同時代の『延喜式』という史料によれば、土佐から都に租税をはこぶため要する標準日数は三五日とされている。悪天候や風待ち潮待ちのため、港に長期停泊することが計算されているためで、貫之の時も二日以上泊まっていた日数の合計は四四日に達した。とくに大湊・室津ではそれぞれ一〇日間の滞留である。

正月一七日など、室津からいったん出港したものの引き返している。夜が明けるにつれ、梶取（船頭）らが「黒い雲が急に出てきた、風が吹くに違いない」といいだし、雨も降り出したから。東よりの逆風が吹く中では、室戸岬を越えることは困難だろう。貫之は不満でも船では船頭の判断は絶対である。

後世土佐藩主も参勤交代にあたり、高知～大坂間は船を利用した。それに要した日数は江戸中期で平均片道二〇日を超えている。むしろ江戸初期の方がずっと速い(2)。大きな海難事故もあり、やがて参勤交代は四国山脈を突っ切って北上する陸路に切り替えられた。

(1)　石井謙治『図説・和船史話』（一九八三年・至誠堂）
(2)　清水孝之「近世航海資料より見た土佐日記の海事について」『愛知県立芸術大学紀要』二号（一九七一年）
高橋昌明「『土佐日記』の船路」（『歴史家の遠めがね・虫めがね』二〇〇七年・角川学芸ブックス）

参考文献

◉教材研究・授業研究のために

テキスト・注釈書

- 『土佐日記』（古典文庫）鈴木知太郎・松尾聡（一九四九年・古典文庫）※尊経閣文庫蔵『土佐日記』（国宝）の複製
- 『影印本土左日記（新訂版）』萩谷朴編（一九八九年・新典社）、東海大学付属図書館蔵（桃園文庫旧蔵）青谿書屋本の影印（写真複製）
- 『土左日記　かげろふ日記　和泉式部日記　更級日記』（日本古典文学大系）鈴木知太郎・川口久雄・遠藤嘉基・西下經一（一九五七年・岩波書店）
- 『土佐日記』三谷栄一（一九六〇年・角川ソフィア文庫）
- 『土佐日記全注釈』（日本古典評釈・全注釈叢書）萩谷朴（一九六七年・角川書店）
- 『土佐日記』（日本古典全書）萩谷朴（新訂版一九六九年・朝日新聞社）
- 『土佐日記』（日本古典文学全集）松村誠一（一九七三年・小学館）
- 『土佐日記』村瀬敏夫（一九八一年・旺文社文庫）
- 『土佐日記』（完訳日本の古典）松村誠一（一九八三年・小学館）
- 『土佐日記全訳注』品川和子（一九八三年・講談社学術文庫）
- 『土佐日記訳注と評論』今井卓爾（一九八六年・早稲田大学出版部）
- 『土佐日記　貫之集』（新潮日本古典集成）木村正中（一九八八年・新潮社）
- 『土佐日記』川瀬一馬（一九八九年・講談社文庫）
- 『土佐日記』（新日本古典文学大系）長谷川政春（一九八九年・岩波書店）
- 『土佐日記』（新編日本古典文学全集）菊地靖彦（一九九五年・小学館）

研究書

- 『土佐日記の地理的研究―土佐国篇―』竹村義一（一九七七年・笠間書院）
- 『紀貫之』（人物叢書新装版）目崎徳衛（一九八五年・吉川弘文館）
- 『紀貫之』（日本詩人選）大岡信（一九七一年・筑摩書房）
- 『「古今集」以後における貫之』菊地靖彦（一九八〇年・桜楓社）
- 『紀貫之伝の研究』村瀬敏夫（一九八一年・桜楓社）
- 『紀貫之論』（新鋭研究叢書）長谷川政春（一九八四年・有精堂出版）
- 『研究資料日本古典文学⑨日記・紀行文学』（一九八四年・明治書院）
- 『宮廷歌人紀貫之』（日本の作家）村瀬敏夫（一九八七年・新典社）
- 『紀貫之』藤岡忠美（二〇〇五年・講談社学術文庫）
- 『土佐日記』（ビギナーズ・クラシックス）西山秀人（二〇〇七年・角川ソフィア文庫）
- 『歴史家の遠めがね・虫めがね』高橋昌明（二〇〇七年・角川学芸ブックス）
- 『ミネルヴァ日本評伝選　紀貫之』神田龍身（二〇〇九年・ミネルヴァ書房）
- 『歴史から読む『土佐日記』』木村茂光編（二〇一〇年・東京堂出版）
- 『コレクション日本歌人選　紀貫之』田中登（二〇一一年・笠間書院）

◉生徒のためのブックガイド

- 『土佐日記』（ビギナーズ・クラシックス）西山秀人（二〇〇七年・角川ソフィア文庫）

『土佐日記』の世界に難なく親しめるよう工夫されている。恰好の

入門書。

■『歴史から読む『土佐日記』』木村茂光編（二〇一〇年・東京堂出版）

歴史学的なアプローチが新鮮で、やや内容的に難しいかもしれないが、調べ学習にも役立つ。

（福家俊幸）